

# 釧路短期大学幼児教育学科

## 実践報告

### 第3号

2020（令和2）年3月31日発行

#### 目次 .....

##### <授業実践>

貝塚幼稚園における教育課程のあり方と位置づけ

川嶋厚子・菅 彬子・山本竜馬・穴水ゆかり… 1

「保育園見学実習」の学校生活に与える効果と課題

—本学科における実習後アンケートの結果から—

岩野布美子・白川和希・吉川修・井上薫・篠木真紀・進藤信子・穴水ゆかり…14

学生は施設実習で何を学び得るのか

—本学科における実習後のアンケート結果から 第2報—

穴水ゆかり・岩野布美子・篠木真紀・白川和希・進藤信子・吉川修・井上薫…23

##### <実践報告>

未就学の子どもたちのためのファミリーコンサートの実践

—豊かな感性の育ちを求めて—

進藤信子・田中英里…35

##### <2019（令和1）年度事業報告>

2019年度 KJC ランドの運営を振り返って 第2報

—来場者を対象としたアンケート調査結果から—

穴水ゆかり・篠木真紀・岩野布美子・白川和希・進藤信子・吉川修・井上薫…44

2019年度 KJC ランドの活動内容（報告）

…51

# 貝塚幼稚園における教育課程のあり方と位置づけ

川嶋 厚子<sup>i</sup> 菅 彬子<sup>ii</sup> 山本 竜馬<sup>iii</sup> 穴水 ゆかり<sup>iv</sup>

## 1. はじめに

幼稚園教諭・保育士を目指す学生を対象とした授業の中で、年間指導計画について触れる機会がある。貝塚幼稚園の計画を中心に話をすることが多いが、単元を中心とした保育計画を紹介し、教育課程の重要性や、教育課程とは年間指導計画、月間指導計画、さらには週案、日案へとつながっていくものであるという話もしてきた。

しかし限られた授業時間の中では、形ばかりの紹介で終わることもある。また、保育計画にある内容についても、実施後に検証や評価をした上で見直し、次の計画案や子どもたちの活動へとつなげていくのだということにも触れたいと考えた。そこで改めて、貝塚幼稚園の教育課程について考えてみたい。

## 2. 貝塚幼稚園の概要

本園は釧路市内の住宅地にあり、各クラス18名の2学級（2019年6月現在）で、3歳児から5歳児までの異年齢教育を行っている。園の教育は自然にふれる機会の多い環境の中でのびのびと遊び、身体と心がたくましく育つこと、自ら考え行動することを目標としており、「一人一人の子どもが活かされる環境づくり」「恵まれた自然を活かした活動」「家庭との連携を密にし、連携を深める」に重点を置いている。

1日の流れは表1の通りである。

表1 保育日課

時間	保育活動
8:30	登園、自由保育
9:30~10:30	課題保育（単元に基づいての活動）
10:30~11:30	自由保育
11:30~12:30	昼食(お弁当)・自由保育
12:30~13:00	降園準備 絵本読み聞かせ
13:00	降園

## 3. 貝塚幼稚園の教育課程

昭和49年（1974年）の開園当時の年間指導計画は現在のものとは異なり、全領域を網羅しながら行事を計画していたという。しかしその年間指導計画を進めていく中で、保育そのものが細切れになっているということに教員の間でも疑問が感じられるようになり、徐々に手を加え、変化を重ねていった中で、現在の単元中心の保育となっていた。

教育課程とは、幼稚園に入園してから修了するまでに子どもが身につける経験の総体を示し、その道筋を定めたものである<sup>1)</sup>。貝塚幼稚園でも教育目標に向かって教育課程を作成しているが、貝塚の保育が「単元」という名前のもとで進めているため、教育課程そのものを単元に合わせて作成している。教育課程について紹介する前に、「単元」についてふれたい。

<sup>i</sup> 貝塚幼稚園園長・釧路短期大学非常勤講師 <sup>ii</sup> 貝塚幼稚園教諭 <sup>iii</sup> 貝塚幼稚園教諭  
<sup>iv</sup> 釧路短期大学専任講師

## (1)貝塚幼稚園における「単元」とは

単元とは「児童の学習過程における学習活動の一連の『まとまり』」を意味する<sup>2)</sup>。小学校においても単元ごとに学習を進められることがあるが、本園ではむしろ単元の「テーマ」に近いものを意味して「単元」という言葉を使用している。単元を展開していく前に、各担当が単元案を作成して実践を進めている。本園においても単元案は教育課程を基に作成し、各単元の中に5領域を網羅し、総合的に展開できるように立案している。

教育課程は「年間単元指導計画」という通り、年間、月間指導計画にも位置づけられる。他に「5領域」<sup>3)</sup>の年間指導計画があり、それぞれ領域別の活動を掲げている。単元の作成時には、教育課程の他にこの領域別の活動も一年間を見通して盛り込む。また本園の単元案には、その単元の期間や展開のしかたの詳細、週のねらいや環境構成など、週の行事、自由保育中に担当が進めたいと考える遊びなども記載している。表2は、後で紹介する単元案にかかわる、6～7月の「教育課程・年間単元指導計画」である。

## (2)貝塚幼稚園における「指導計画」

本園においては、指導計画は以下の通り、5領域をもとに作成している。

### 1)「健康」

「健康」のねらいは、①明るくのびのびと行動し、充実感を味わう ②自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする ③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身につけ、見通しをもって行動する である。

活動には「運動」と「生活」を挙げており、「運動」の領域では、基礎的な運動や、縄や風船などの道具を使った遊び、鬼ごっこや相撲あそび等の集団遊びを行う。この他、木登りや笹原探検など、恵まれた自然環境を生かして活動している。

### 2)「人間関係」

「人間関係」のねらいは、①幼稚園生活を楽しみに、自分の力で行動することの充実感を味わう ②身近な人と親しみ、かかわりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ ③社会生活における望ましい習慣や態度を身につける である。

本園の教育目標に「自分で考える」「進んで行動する」力を育てると掲げているが、例えば昼食の時間のお手伝いについてはあえて役割を決めておかず、子どもたちが自分たちで仕事を分担して、友だちと協力して行うよう配慮している。

### 3)「環境」

「環境」のねらいは、①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ ②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする ③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする である。

園の周辺の自然を活かし、春は散歩をしながら桜を探し、「健康」にも通じる活動だが、よもぎを摘んできてホットケーキを作り、おやつにする。たんぼぼの茎で風車や花冠を作り、綿毛飛ばしをす

る。あえて雨が降る日に散歩をしてみる。冬はつららを探し、霜柱を踏んでその感触を楽しむ。濡れたタオルの実験をして、板状に凍るようすを確認する。みんなでかまくらを作って遊ぶ。

「数量や図形、物の性質や文字などに関心をもつ活動」では、例えば幼児の数概念は「3」までを獲得した後、4歳児でも「4」以上の数の概念の獲得には時間がかかることが多い。しかし小学校からの算数は10進法が基本となるため、まずは「5」の数の概念を獲得できるように、遊びや生活の中で、積極的に5の数を取り入れる。例えば言葉遊びをする際に、子どもたちが次々と発言していく言葉をホワイトボードに横5つずつ並べて板書していく。すると、「5」の数を獲得した子どもたちは、縦2列では10、3列では15と数えてみるようになり、自然に5のかけ算までも身につけていく。また、園では椅子を片付けるときに、5つずつ積み重ねるようにしている。お片付けを手伝う子どもたちは、6つ目の椅子を隣に置くようになる。こうした中でも「5」という数を理解していく。

#### 4)「言葉」

「言葉」のねらいは、①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう ③日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる である。

1学期の初め、ことば遊びは頭音から始める。「『か』のつくもの、なーんだ」といった頭音遊びは、保育室ばかりでなく家庭でも行われている。順に思いついた言葉を「カメ」「カスタネット」などと挙げていく遊びで、年少児は、年上の子どもたちが挙げていく名前から新しい言葉を覚えていくという学びの効果もある。担任が家庭に向けた学級通信で「(おうちでも)やってみませんか」と近況として紹介した際に、切り取り線を引いたコーナーを作ると、家庭で頭音遊びを試みて、親子やきょうだいで出しあった言葉をメモに書き込み、園に持ってきてくれる家庭もあり、それは学級通信で紹介している。こうして家庭をも巻き込んで、子どもたちは言葉遊びを続けていくが、「か」を頭音とする言葉は子どもにとって思いつきやすいようで、子どもたちから出てきた「か」のつく名詞を集めてみると、今年度は150個を超えた。例年、どの言葉が最も多かったのかを学級通信でランキング発表をしているが、1位は「カサ」「カラス」、2位「カニ」、3位「カエル」「カモメ」「カレーライス」だった。子どもたちにとって身近なものをうかがうことができるため、このランキングは教員にとっても興味深いものである。

6月頃になると、「言葉の仲間集め」を始める。子どもにとって比較的わかりやすいのは味覚などで、「甘い、甘い、なーにが甘い？」とみなで歌い、順に「アメ」「砂糖」など、子どもたちは思いつくままに、甘いものを挙げていく。「手ですることは何ですか」、「叩く」「弾く」…という、動作にかかわる「お題」は、幼少児にはやや難しく、なかなか思いつかない。2学期に入ると音節遊び、「おしまいの音は、なーに？」という尾音遊びやしりとりができるようになり、3学期には文作りができるようになっていく。

#### 5)「表現」

「表現」のねらいは、①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ ③生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ である。

表現活動には、①音楽リズム ②造形表現 ③劇 があげられる。子ども自身による音遊びや身体

表現、創作活動の他、演劇や影絵などの観劇、不定期だが音楽家が来園してコンサートを聴く機会もある。1年に1度、美術館の特別展へ行くと、子どもたちは気に入った絵葉書を1枚ずつ購入するが、園からは家庭に「自宅の一番よいところに飾ってください」と伝えている。こうして、さまざまな芸術にふれる機会をつくっている。

#### 4. 単元案からみる教育課程

6～7月の単元は、青組は「釣り船ごっこ」、緑組は「忍者ごっこ」である。子どもの実態、4月からの発達状態や年齢を考慮しながら展開していく（表3～6）。

(1)青組「釣り船ごっこ」の実践をもとに

1)「釣り船ごっこ」の実践

単元案は表3及び表4の通りである。

3歳児の教育課程のねらい「集団遊びのルールに気づく」を、単元案の中では子どもの育ちを高めることを目的に、「自分の役がわかり、楽しんでごっこ遊びに参加する」と設定している。3歳児にとっては初めての本格的なごっこ遊びだが、3歳児たちは年長児たちにうまくリードされて、ごっこ遊びの世界へ入っていく姿がみられた。

また、4歳児にとっても大きな単元となり、クラス全体で取り組んでいく中で、自分の考えていることや、「やってみたい」という思いを仲間や保育者に伝えていくことを、ごっこ遊びの中の役になりきることによって達成しようとしていた。

年長児である5歳児にとって、「釣り船ごっこ」は3回目のごっこ遊びの単元となる。教育課程の中のねらい「友だちと考えを伝え合いながら遊びを展開することができる」は、単元案では「みんなでごっこ遊びを盛り上げよう」という言葉に置き換えられているが、まさにこれまでの様々な体験が育ちの基礎となり経験となって、クラス全体の活動に活かされていた。

ごっこ遊びには、観察力や記憶力、イメージする力、それを表現する力とかかわりがあり、ごっこ遊びができるということは、それらの発達の表れである。自分の中でのイメージを再現するばかりでなく、他の子どもとイメージを共有してごっこ遊びをすることが可能になっていくのは3、4歳頃からと考えられているが、そうした発達段階にある子どもたちも、年長の子どもたちの力を借りながら一緒に楽しむという、5領域でいえば「人間関係」上の成長もみられた。

展開中は、自由保育中にも子どもたちが歌になじめるように、保育者がピアノで「魚釣り」の歌を弾いた。また、子どもたちが自由に船に乗って遊べるようにしておき、その遊びの中で子どもたちの会話を「釣り船ごっこ」につなげていった。



写真1 船、海の生き物は子どもたちが製作。青いテープを手にしている子どもは「波」の役。

写真にみられる通り、展開の最後には、隣の組の子どもたちや、保護者も参加して「釣り船ツアーごっこ」を楽しんだ。保護者が来園する保育参加では、釣り船ツアーにお金が必要となる。このためツアーに先立ち、保護者と子どもはあらかじめ、一緒に財布を作っておく。貝塚銀行のお金は子ども祭りで物を買うときにも使われるが、印刷したお札をはさみで切るという作業は、やはり子どもたちが行っている。



写真2 船を停泊させて、海の生き物と遊ぶ。じゃんけんに行けると、ピコピコハンマーでポコン。

## 2) 「保育ドキュメンテーション」的観点から「釣り船ごっこ」の実践をみる

レジジョ・エミリア教育では、長期にわたり1つのテーマを掘り下げる「プロジェクト」を立ち上げる。テーマは子どもたちの話し合いで決められ、工作や調べ物などをする。そのプロジェクト活動の様子をパネルにまとめて展示するのが保育ドキュメンテーションである。その作成の目的は、子どもたちがパネルを見ながら活動を振り返り、次に活かすことである。

本園では、新たな単元案に基づく展開が始まると、日を迫うにつれて、単元のテーマに関連して子どもたちが保育者と一緒に製作をした作品が増えていく。そのようすや製作の過程は、保育者や園児はもちろん、保護者も目にする事ができ、園や家庭でも話題になっている。つまり、本園ではパネル展示をしているわけではないが、活動が進むにつれて増えていく保育室の作品そのものが、保育ドキュメンテーション的効果を発揮しているといえるだろう。

「釣り船ごっこ」を具体例として説明すると、例えば写真1の船は、保育者が「船を作ろう」と提案すると、子どもたちは船の形や色をどのようにしたいか意見を出し合い、最終的には多数決で決める。このときに子どもたちは「みんなで意見を出し合い、話し合って考える」「多数派の意見を採用してものごとを決める」ということを覚える。保育者が船を作り始めると、子どもたちは自分ができる作業を担当し、みんなで協力して作り上げる。「〇〇ちゃんが、舵もあったほうがいいって言っているんだけど、どうする?」「作ってみよう!」「船には錨もあるよ」と意見を出し合い、昨日はなかった小道具が増えていく。小道具が増えると子どもたちの遊びは広がりを見せしていく。

一方、保育者による環境構成も進められていく。子どもたちが自由保育中に遊ぶことができるように、教室には魚釣り遊びやジャンケンガニ遊びの道具が準備される。出来上がった船が配置される。自由保育中にも、保育者がピアノで弾く「魚釣り」の曲が流れている。船の操縦訓練をして操縦免許を取ると、子どもたちは船長や操縦士になることができる。こうして日を迫うごとに、教室には海の世界が広がっていき、子どもたちの世界観もさらに広がっていく。

## (2)緑組「忍者ごっこ」の実践をもとに

### 1) 「忍者ごっこ」の実践

単元案は表5及び表6の通りである。

前述の青組とは違う側面から、緑組の展開をみていく。単元案は「幼児の実態」を基に作成するが、3歳児の実態では「年長児のしているごっこ遊びを真似して、自分たちでやってみようとする子がいる」という記述がある。ごっこ遊びを展開していく上では、年長児たちの真似とはいえ「ごっこ」を意識しやすい環境にあることが、単元案の内容と合っていることが重要である。教育課程にある3歳児のねらい「周囲の友だちに関心を持ちながら遊ぶ」ことが、3歳児の成長をさらに高め、ごっこ遊び全体を盛り上げた。

4歳児も同様に、幼児の実態には「年長児とともにごっこ遊びを楽しんでいる」とあるが、これは教育課程のねらいである「友だちと遊びを共有することができる」という観点からの実態観察といえる。この実態から単元案のねらいでは「忍者ごっこに楽しんで参加する」となり、友だちとの遊びの共有をさらに盛り上げようとしている。

5歳児になると、単元案のねらいにも教育課程のねらいにもあるように、「考えなどを出し合いながら遊びを展開することができる」「友だちと考えを伝えあいながら遊びを展開することができる」など、幼稚園指導要領にある、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」<sup>4)</sup>の10の姿「協同性」や「思考力の芽生え」「言葉による伝えあい」などの到達へと向かっていくと考える。

課題保育では、青組の「釣り船ごっこ」同様に、造形表現となる額当てづくりから始まり、5領域で表現される様々な活動が行われた。忍者修行による運動遊びは自由保育の外遊びにまで発展し、忍者修行の気分で笹原探検にも出かけた。忍者ショーは運動と身体表現ばかりでなく、必要なものを作る制作活動や、ショーの内容について子ども同士が話し合うことにより、人間関係や言葉の領域での成長も促されている。緑組もまた、写真にみられる通り、展開の最後には青組の子どもたちや保護者も参加して「忍者ごっこ」を楽しんだ。保育者は保護者にとってなじみのある『必殺仕事人』のテーマ曲を流して遊びを盛り上げた。

### 2) 「PDCA」的観点から「忍者ごっこ」の実践をみる

PDCAサイクルとは、業務の維持向上のために継続的な改善や向上を行っていくことで「Plan（計画）」「Do（実践）」「Check（評価）」「Act（改善）」、それぞれの頭文字をとって「PDCAサイクル」と呼ばれている。

今年度の「忍者ごっこ」もまた、子どもの実態等に合わせて、前年度とは活動の内容を変更しながら実施している。「P」すなわち実施計画は、表5「単元案」の通り、幼児の実態に合わせて設定している。子どもたちがごっこ遊びの登場人物になりきれるのは、それに対するイメージを持つことがで



写真3 「変身の術」



写真4 「水遁（すいとん）の術」

きるためである。ごっこ遊びに使用する小物は子どもがイメージ作りをする際に役立つため、忍者に対するイメージをふくらませて、気持ちを盛り上げることを目的に、今年は、昨年に行わなかった額当てを製作した。

また、クラス全体をみると、入園前には身体を動かす機会が少なかったのではと感じられる子どもが目立ったため、身体能力の向上も課題の一つとして考えられた。そこで、遊びの中で基本的な動作を獲得していくことを目的として、課題保育では例年以上に「忍者修行」に重点を置いた。「忍者修行」では、子どもは忍者になりきって、楽しく身体を動かすことができた。

「D」すなわち実践について「忍者修行」を例にあげると、修業はまず、「忍者歩き」や「忍者走り」から始めていく。「忍者サーキット」とは、遊戯室を一周するように、平均台や跳び箱、マットなどの障害物を準備する。子どもたちは忍者になりきって、跳び箱からマットへ飛び込む、綱くぐりをするといった運動遊びをする。また、「変化の術」では、保育者が子どもたちに「どんなものに変身しようか」となげかけると、「カエル!」「カラス!」と、さまざまな生き物などがあげられていく。次に「どうやってカエルに変身しようか」となげかけると、それぞれが「ルエカルエカ!」「ケロケロケロケロ、ルエカ!」と言葉遊びを楽しみながら、印を結んでみたり、飛び上がってぐるりと一回転してみたりと、子どもたちは思い思いの術を使いながら、次々と変身していく。これは身体活動ばかりではなく、身体表現や言葉遊びにもつながる活動である。

さらに子どもたちは、自由保育の時間にも「変化の術」を自分たちの遊びの中に取り入れていた。「おもしろいからやってみる」ことが、自分たちで遊びを決める自主性や、身体機能をのばすことにもつながっている。

課題保育の最後には、隣のクラスや保護者を招待して忍者ショーを行うが、その内容や必要なものも、子どもたちが話し合いや多数決で決めていく。忍者ショーの内容は、修行で行った「変化の術」の中から選ぶが、年少児が多いときには年少児がイメージしやすいもの選ばれていく。ショーは数日にわたって行われ、それぞれの役割や変身するものも日替わりとなるため、必ずしもショーの当日に成功するとは限らない。しかし一方で、写真4にある「水遁の術」とは、仰向けになってテープのカーテンを背中で這いながらくぐり、移動する「術」だが、この動きが当初は難しかった子どもが自由保育の時間に自主的に練習を重ね、ショーの当日は上手にできるようになるという成長もみられた。

「C」すなわち評価としては、「忍者ごっこ」の単元が終了した後に反省会を開いた。本園では、1つの単元が終わるごとに反省会を行っている。単元は年間9単位用意しているため、反省会も9回行われているということになる。貝塚の教育課程は直接単元に結びついているため、この単元で反省されたことが教育課程の見直しにもつながっている。

「忍者ごっこ」については、子どもの実態から課題となっていた「身体能力の向上」については、「忍者修行」の中で、保育者が意図的に身体を動かす機会をつくり、その後、子どもたちは自由保育の遊びの中でも忍者修行を取り入れ、積極的に身体を動かすようになっていた。年間の活動を通して、保育者は課題保育で行った遊びを、子どもたち自身が自由保育の時間に、さらに発展させることを願っているが、その点についても評価できた。

「A」すなわち改善については、反省会では評価とともに改善点について協議し、次の単元案や来年度の実践につなげていくが、今年度の忍者ごっこでは、反省会で協議するよりも、むしろ展開の中で小さな評価と改善を重ねて進めていった。

## 5. 終わりに

本園の活動は、単元を設定した上での保育であるため、設定保育時間中心に進められているようにも感じられるが、実際には一日を通して、あるいは単元期間全体を通して設定保育終了後、子どもたちが自ら設定保育の続きとなる遊びを行っているようすや、別の遊びに発展させているようすもみられる。自由保育中にみられる、子どもたち自身が考えた遊びについては、保育者は見守り、単元を意識しながらも自分たちで考えた遊びを発展できるようになることを重視している。保育者は自由保育中の子どもの個々の発達をとらえ、考え、大切にしている。保育者主導にならないよう、そこから得られるものは大きいと考えている。

本稿の執筆は、教育課程を改めて見直すよい機会となった。単元の反省会から得たものを、教育課程に直接反映することが難しかった。今後も、子どもたちの発達や個に応じて、子ども一人ひとりの育ちを見て、その実態に応じた、生きた教育課程を作り上げていきたい。子どもたち個々の発達をのばし、個性や能力を引き出す実践を続けていくことを課題としたい。

### <文献・解説>

- 1) お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター 幼児教育ハンドブック
- 2) 文部科学省 (2011) . 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (小学校編)
- 3) 「5 領域」とは：保育所や幼稚園での教育目標を具体的に設定するための領域で、「子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」ことを実現させるために分類されている。この 5 つの領域に基づいた保育を実施することで、子どもの総合的な心身の発達を促すことができるとされている。具体的には、①心身の健康にかかわる「健康」 ②「人間関係」 ③身近な環境とのかかわりである「環境」 ④言葉の獲得にかかわる「言葉」 ⑤感性と表現にかかわる「表現」の 5 つである。
- 4) 「10 の姿」とは：5 領域にある子どもの姿を細分化し、より具体的に提示したもの。幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 姿は、到達度評価ではなく、どのような経験を子どもたちに保障できているのかをとらえるための視点である。具体的には、①健康な心と体 ②自立心 ③共同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活と関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量・図形、文字等への関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現。

教育課程・年間単元指導計画 (表2)

単元	期間	年齢	個と集団の発達過程	幼児の実態(姿)	ねらい	内容	環境構成と留意点
ごっこ遊び	六月 ～ 七月	3歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>○周囲の友だちに関心をもつ</li> <li>○思い思いの遊びを見つけ遊び始める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園での生活の仕方がわかり始め、個人差はあるものの自分でやろうとする</li> <li>・友だちとかかわろうとし、好きなことをしたり、興味のある遊具で遊ぶ</li> <li>・自己中心的な部分があり、道具の貸し借りなどでトラブルになることがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の友だちに関心を持ちながら遊ぶ</li> <li>・園生活を楽しむ</li> <li>・集団遊びのルールに気付く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちを意識しながら遊ぶ</li> <li>・自分の好きな遊びを見つけ遊ぶ</li> <li>・色々な遊具に興味を持ち、それらを使って遊ぶ</li> <li>・園生活の基本的な生活習慣がわかり、自分でしようとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと共有出来る遊びの構成、道具の環境を作る</li> <li>・自分でしようとする事を見守り、最低限の援助にする</li> </ul>
		4歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友達との関わりを楽しく感じたり、遊びや興味の幅が広がっていく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちに親しみをもち、かかわりあいながら一緒に過ごすことを楽しむ子もいる</li> <li>・遊びを通して色々な友だちとかかわって遊ぶ姿が見られるが、自分の思いを通そうとして衝突する事もある</li> <li>・色々な遊具に興味を持ち、様々な遊びを楽しむ姿が見られる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちに親しみをもちながら遊ぶ事ができる</li> <li>・友だちと遊びを共有することができる</li> <li>・自分の気持ちを人に伝える事ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちとかかわり、ごっこ遊びなどをする</li> <li>・小集団で遊ぶ</li> <li>・言葉遊びなどで発言する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこを展開しやすいような用具等の環境作り</li> <li>・小集団で遊べるような遊びの構成</li> <li>・子どもが話しやすいような人的環境と空間を作る</li> <li>・一人一人の実態を把握しながら環境を作る</li> </ul>
		5歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友達と思いを伝えながら活動を進める</li> <li>○互いの気持ちや考えを伝えあって、遊びや、友だちへの関心を深める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこを進める中で、自分の考えを伝えあう姿が見られる</li> <li>・友だち関係が広がり、道具の使い方や素材を工夫して遊ぶ</li> <li>・身近な自然に対する興味が高まってきている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動に関心を持ち、意識的に行動する</li> <li>・友だちと考えを伝えあいながら遊びを展開する事ができる</li> <li>・積極的に自然とかかわり、遊びに取り入れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこ遊びを友だちと考えを伝えあいながら展開していく</li> <li>・相手の意見を受け止めながら遊ぶ</li> <li>・戸外遊びの中で、自然とかかわって遊ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこを展開しやすいような用具等の環境作り</li> <li>・年長児としての自覚を持たせるような、場面構成を考える</li> <li>・年長児が自発的に調べたりできるように、物的環境(図鑑など)を用意する</li> </ul>

# 単 元 案 (表3)

組 青組      担任名 菅 彬子      3歳児      9名 4歳児      5 5歳児      4 計      18

単 元 名 釣り船ごっこ      期 間 6/17~7/24

幼児の実態	
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気の合う友だちとの遊びを楽しんでいる</li> <li>・平行遊びだった子たちも、友だちの存在に気づき始め、関りをもとうとしている様子が 見られる</li> </ul>
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気の合う友だちと何かになりきって遊んでいる姿が見られる</li> <li>・活動に対して「あー、したい」「こうしたい」という意欲が出てきた</li> </ul>
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの遊びに必要な物を考え、作ったり、書いたりして遊びを発展させている 子どもたちもいる</li> <li>・活動の中で積極的に意見を出し、年中、年少を含めて話し合おうとする</li> </ul>

設定理由
<p>4月からの暮らしの中で、子どもたちの会話の中に、よく乗り物の名前が出てきた。単純な「車」「ひこうき」「電車」「汽車」「JR」から、具体的な「デリカ」「カローラ」などの車種や「はやぶさ」などまで。今年の子どもたちは乗り物に興味・関心のある子が多いようだ。しかし、同じ乗り物でありながら「船」については、あまり子どもたちからでてこない。そこで、船を単元で取り上げ、子どもたちの興味・関心の幅を広げたいと考え、この単元を設定する。子どもたちの好きな釣り遊びをからめ、釣り船とし、ごっこ遊びとして展開する中で、クラスの仲間、友だちとしての関係を深めたいと考える</p>

ねらい
<p>全体</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・釣り船ごっこを楽しむ      ・クラスの仲間と一つの遊びを作り上げる楽しさを感じる</li> <li>・船への興味・関心を高め、意欲的に活動する</li> </ul>
<p>3歳児</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・船に興味を持ち、釣り船ごっこを楽しむ</li> <li>・自分の役がわかり、楽しんでごっこに参加する</li> </ul>
<p>4歳児</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・船に興味・関心を持ち、積極的に取り組む</li> <li>・自分の役がわかり、役になりきって、ごっこに参加する</li> </ul>
<p>5歳児</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・船への関心を高め、互いに考えを出し合いながら、釣り船ごっこに意欲的に取り組む</li> <li>・役になりきって活動することを楽しみ、みんなでごっこを盛り上げようとする</li> </ul>

留意点 ・ 主な環境構成
<ul style="list-style-type: none"> <li>・現実の船だけでなく、空想を含めた様々な船の出てくる絵本を読む</li> <li>・課題保育中に限らず、自由保育中に子どもたちがしている船の活動に関する言葉を拾い上げ、ごっこ遊びにつなげていく</li> </ul>

準備
<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本～『船が来た』『おふねにのるニャン』『ふねのたび』</li> <li>・ダンボール紙 ・ポスターカラー ・はけ ・ガムテープ ・フープ ・画用紙 ・モール ・釣り竿</li> <li>・ピコピコハンマー</li> </ul>

展 開(表 4)

	6/17(月)～6/28(金)	7/1(月)～7/5(金)	7/8(月)～7/12(金)	7/16(火)～7/24(水)
課 題 保 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車・バスごっこをしよう</li> <li>・魚釣りをしよう (保育参加)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船を作ろう                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合い</li> <li>・色ぬり</li> <li>・組み立てよう</li> </ul> </li> <li>・海の中を泳ごう                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャンケンガニとジャンケンしよう</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船の操縦訓練をしよう                             <ul style="list-style-type: none"> <li>操縦免許ゲット!</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船ごっこ                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・釣りをしに行こう!</li> <li>・ジャンケンガニと勝負しに行こう!</li> </ul> </li> <li>・釣り船ツアーごっこをしよう</li> </ul>
ね 週 の い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乗り物に関する活動を楽しむ。</li> <li>・魚釣りから船に興味を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船に興味・関心をもち、積極的に活動する。</li> <li>・互いに助け合い、教え合いながら共同制作を進めることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船にかかわる活動への関心を高め、意欲的に取り組む。</li> <li>・船ごっこを楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・役になりきって参加し、釣り船ツアーごっこを楽しむ。</li> </ul>
主 な 環 境 構 成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々な乗り物の絵本を保育室に置く</li> <li>・魚釣りはいつでもできるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船に関する絵本を目に入る所に置く</li> <li>・自由保育中にもピアノを弾き、歌になじめるようにする</li> <li>・ジャンケンガニのハンマーはいつでも使えるようにする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・免許証を作ることで、船を操縦することへの期待、意欲を高める。</li> <li>・自由保育中にも船に乗って遊べるようにし、その中での子供の会話をごっこにつなげる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・役になりきれよう、小道具を用意する。</li> <li>・保育をツアーの展開に合わせて環境設定する。</li> </ul>
自 由 保 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>屋外～砂・水遊び、どろだんご作り</li> <li>屋内～工作・ボール</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>虫捕り</li> <li>船ごっこ</li> </ul>		
行 事	<ul style="list-style-type: none"> <li>6/19(水) 保育参加(緑)</li> <li>6/20(木) 保育参加(青)</li> <li>6/25(火)～6/27(水) 自由保育参加</li> <li>6/24(月)～6/27(木) 釧路短大実習生による前日実習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>7/3(水) 地震避難訓練</li> <li>7/5(金) 親子遠足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>7/11(木) 体験入園</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>7/18(木) 交通安全教室</li> <li>7/19(金) 防災センター見学</li> <li>7/24(水) 1期終業</li> </ul>

## 単 元 案 (表5)

組 緑                      担任名 山本 竜馬                      3歳児                      8 4歳児                      5 5歳児                      5 計                      18

単 元 名 忍者ごっこ                      期 間 6/17~7/19

幼児の実態	
3歳児	・周囲の友だちや友だちのしていることに興味を持ち、関わろうとする子がいる ・年長児のしているごっこ遊びを真似して、自分たちでやってみようとする子がいる
4歳児	・年長児と共にごっこ遊びをし、楽しんでいる ・ごっこ遊びの中で役割を決めたりしているが、折り合いがつかなくなったりすることもまだ多い
5歳児	・役割を決めてのごっこ遊びを楽しんでいるが、自分の思っていることや考えたことを伝えられる子とそうでない子がいる ・遊びの中で「どうして」「これは何？」と興味を持ち、自分なりに考えたり、調べたりする子がいる
設定理由	
<p>普段、子どもたちがしているごっこ遊び。内容に違いはあれど、どの子も何かになりきったり、役割を決めての遊びを楽しんでいる。また、今年の子どもたちは「忍者はさあ〜」「〇〇の術って、知ってる？」「忍者になるにはね・・・」と忍者に対して様々なイメージを持っているようだった。そこで単元として”忍者”を取り上げ、ごっこあそびを展開していく。一人一人が忍者になることを楽しめるような活動をしながら、子どもたちの関心の高まりに期待したい。さらに一期のこの時期であることも考慮し、これまで経験してきた活動を取り入れながら、クラス全体で楽しめるよう展開していきたい。</p>	
ねらい	
全体	・忍者ごっこを楽しむ ・忍者に興味・関心を持ち、活動に取り組む
3歳児	・忍者になりきることを楽しむ ・忍者に興味を持つ
4歳児	・忍者に興味・関心を持つ ・忍者ごっこに楽しんで参加する
5歳児	・忍者になりきることを意識し、活動に取り組む ・忍者への関心を高め、考えなどを出し合いながら、意欲的に活動する
留意点 ・ 主な環境構成	
<p>・忍者に関する絵本を保育室に置く ・生活の中で忍者が意識できるような会話や言葉を心掛ける ・ごっこ遊びを楽しめるよう、小道具などの準備をする</p>	
準備	
<p>・絵本『赤忍者』『ニンジャさるとびさすけ』 ・画用紙 ・シール ・輪ゴム ・積み木 ・フープ ・マット ・ダンボール ・すずらんテープ ・ストローなど</p>	

展開(表6)

	6/17(月)～6/28(金)	7/1(月)～7/5(金)	7/8(月)～7/12(金)	7/16(火)～7/24(水)
課題保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵本『あかにんじゃ』</li> <li>歌あそび『なんじゃもんじゃにんじゃ』</li> <li>忍者になるう</li> <li>額当てづくり (保育参加)</li> <li>忍者カードで遊ぼう <ul style="list-style-type: none"> <li>忍者探しゲーム</li> </ul> </li> </ul>			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵本『ニンジャさるとびすすけ』</li> <li>修行をしよう <ul style="list-style-type: none"> <li>忍者歩き</li> <li>忍者走り</li> <li>変化の術 (身体表現)</li> <li>忍者サーキット</li> </ul> </li> <li>忍者ショーをしよう <ul style="list-style-type: none"> <li>ショーの内容決め (話し合い)</li> <li>必要なものづくり</li> </ul> </li> <li>お客さんを招待しよう!</li> <li>練習をしよう</li> </ul>			
ね週 の い	・にんじゃに興味・関心をもつ。	・にんじゃへの興味・関心を高める。 ・忍者になりきることを楽しむ。	・忍者を意識しながら積極的に活動に取り組む。	・発表することに期待をもち、意欲的に活動する。
環主 境な 構 成	・忍者に関する絵本を保育室に置く。 ・生活する中で起こるちょっとしたことを「忍者の仕業かも!?!」と結びつけて話す。	・保育者も忍者になりきって楽しむ。 ・子どもから出た忍者に関する発言を取りあげて全体に発信する。	・例を出すなどして、子どもたちがイメージをもちながら話し合えるようにする。	・ショーや忍者を意識できるような会話を心がける。
自 由 保 育	外—水、泥あそび、虫捕り、笹原探検      室内—工作、なわとび、忍者ごっこ			
行 事	6/19(水)、6/20(木) 保育参加 6/25(火)～6/27(水) 自由保育参加	7/3(水) 地震避難訓練 7/5(金) 親子遠足	7/11(木) 体験入園	

# 「保育園見学実習」の学校生活に与える効果と課題 —本学科における実習後アンケートの結果から—

岩野布美子<sup>i</sup> 穴水ゆかり<sup>ii</sup> 白川和希<sup>iii</sup> 吉川修<sup>iv</sup> 篠木真紀<sup>v</sup> 進藤信子<sup>vi</sup> 井上薫<sup>vii</sup>

## 1. はじめに

本学1年生に対して行ったアンケートの結果をもとに、今年1月20日（月）～25日（金）の5日間で実施した保育園見学実習の、その後の学校生活に与える効果と課題について検討することを目的とする。

児童福祉法第十八条の四において、国家資格である保育士とは「専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」と位置づけられている。保育士は保育所のみならず、施設で生活する子どもの養護にも関わる専門性を有している。国で定めている実習基準はTable.1のとおりである。

本学の保育実習実施基準はTable.2のとおりである。本学の「保育実習Ⅰ」とは、5日間の「見学実習」と本実習の1週目、「保育実習Ⅱ」は本実習の2・3週目としている。

本学では入学後、1年生の6月に「保育観察」を行っている。これは6月に午前中の半日6回、グループごとに6つの保育園及び幼稚園を訪問し、おもに子どもたちとの自由遊びの参加と、活動の見学を行うものである。10月頃にはやはり午前中の半日4回、学生が選択した保育園及び幼稚園で観察実習を行う。原則として2施設2回ずつを基準

として、多くの学生が保育本実習先と幼稚園実習先を選択する。これらは保育士養成にかかわる「保育実習」のカリキュラムには含まれていないが、学生が本実習に向けて、保育現場に慣れていくという効果がみられる。

今回実施した「見学実習」は先に述べたとおり本実習（保育実習Ⅰ）の1週間目にあたり、例年1月末に5日間実施する。残りの3週間・15日間分は、2年生の8~9月に実施する。以上のとおり、本学では本来4週間続く保育実習を分割し、また実習科目としてのカウントはないが1年生の春から、学校生活の中での学びを深め、学びに対する姿勢やモチベーションをもたせていく。また、保育現場に慣らしていくことにより、実習をきっかけとしたドロップアウトを抑止する効果もあると考えられる。

以上のカリキュラム構成により、本学で例年実施している「見学実習」だが、国で定める基準内とはいえ、あえて実施の方法を変更する意味や意義はあるのだろうか。

本稿では「見学実習」から学生は何を学び、それを今後どのように活かしていくのかを検証したい。

Table.1 保育実習実施基準 第2 履修の方法

実習種別 (第1 欄)	履修方法 (第2 欄)		実習施設 (第3 欄)
	単位数	実習における おおむねの 実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	4 単位	20 日	(A)
保育実習Ⅱ (選択必修)	2 単位	10 日	(B)
保育実習Ⅲ (選択必修)	2 単位	10 日	(C)

Table.2 本学のカリキュラムによる保育実習実施基準

実習種別	履修方法 (第2 欄)		実習施設
	単位数	おおむねの 実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	2 単位	10 日	保育所
保育実習Ⅱ (必修科目)	2 単位	10 日	保育所
保育実習Ⅲ (必修科目)	2 単位	10 日	福祉施設
保育実習Ⅳ (選択必修)	2 単位	10 日	福祉施設

<sup>i</sup> 幼児教育学科教授   <sup>ii</sup> 幼児教育学科専任講師   <sup>iii</sup> 幼児教育学科専任講師

<sup>iv</sup> 幼児教育学科准教授   <sup>v</sup> 幼児教育学科専任講師   <sup>vi</sup> 幼児教育学科教授   <sup>vii</sup> 幼児教育学科教授

## 2. 調査方法

2020年1月に5日間行われた保育園見学実習に参加した本学幼児教育学科1年次の学生49名(男子2名、女子47名)を対象とした。2020年2月、実習終了後の振り返りを行った実習関連の授業時に回収した。44名から回収され、回収率は89.8%だった。

## 3. 調査結果

### (1)実習中の状況

#### 1)出勤状況

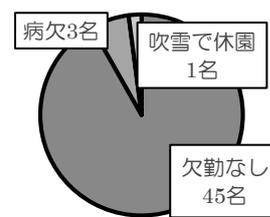
この項目のみ、教員が学生の欠席状況を把握していたため、母数は未提出者を含む全学生49名となっている。

「実習は5日間休まず出勤できましたか?」という質問に対して、「出勤できた」と回答したのは9割強(45名、91.8%)だった。病欠者は3名(6.1%)、吹雪で休園したために実習が延長になったのは1名(2.0%)だった。

悪天候により休園となったのは、学生の実習先では1施設のみだったが、この日は釧路管内のほとんどの幼稚園が休園、学校が休校となっていた。文部科学省管轄である学校や、法的に「学校」と定義される幼稚園では「非常変災その他急迫の事情があるときは、校長は、臨時に授業を行わないことができる」と法で定められているが、厚生労働省管轄で「児童福祉施設」と定義づけられている保育所では、保護者の就労や病気などにより「保育に欠けるその乳児又は幼児を保育する」役割がある。荒天であっても保護者が出勤せざるを得ない場合、子どもは「保育に欠けた状態」となることから、この日に臨時休園を選択した保育園は少なかったものと推測される。

このことから、吹雪で交通障害が起きたこの日ばかりでなく、保育士が災害時に出勤して職務につく場合が多いことが推測できる。子どもの安全や生命を守ることは通常時でも重責だが、災害時にはさらに責任が重くなる事態もあり得るということを、学生に考えさせるきっかけとなったが、同時に実習生を送り出す養成校は、学生の通勤時の安全についても再考・再確認する必要があるだろう。

Figure.1 出勤の状況



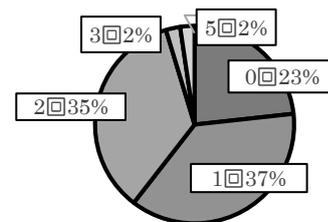
#### 2)部分実習の実践

##### ①部分実習はできたか

「部分実習は、実践出来ましたか」という質問に対して「できた」と回答したのは33名(76.7%)で、その内訳は1回16名(37.2%)、2回15名(34.9%)、3回及び5回はそれぞれ1名(2.3%)だった。実践が「できなかった」のは5園の10名(23.3%)だった。

学生にとって見学実習の場で行う部分実習は、今後の学びにも影響する貴重な機会である。実習園にはぜひ実践させていただきよう、見学実習を依頼する際にあらためてお願いしておきたい。

Figure.2 部分実習の実践

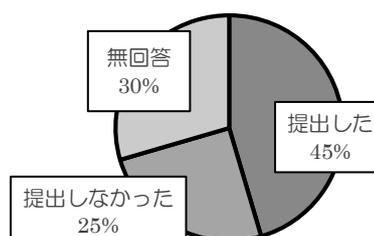


##### ②指導案について

約30%が回答しなかったため(18名、29.5%)実情を把握しにくい。提出したのは約半数だった(20名、45.5%)。約1/4の学生は提出を求められなかった(11名、25.0%)。

本学では秋頃から少しずつ、部分実習に向けて指導案の作成について指導を重ねている。指導案の作成は多くの学生にとっては難易度の高い作業で、実習指導者にとっても時間と手間がかかるものだが、見学実習で作成、実践をする機会をもつことができるように、実習園にはお願いしたい。

Figure.3 指導案の提出



### ③部分実習の内容

主なもののみを記載すると、絵本は『あの子の宝物』他 41 冊だった。

手遊びは「グーチョキパーで何作ろう」2名、「キャベツの中から」3名、「はじまるよ」6名、「トントンひげ爺さん」2名、他 18 曲で計 31 曲だった。

その他、紙芝居は『世界一大きなケーキ』他 4 冊、ペープサート「動物クイズ」1 名で、お別れ会の出し物をしたと回答したのは 3 名だった。

### 3) 日誌の提出状況

実習中の日誌は翌日提出することになっている。回答者 44 名の全員が翌日、提出できたと回答した。

### 4) 見学実習をしたクラスの乳幼児の年齢

5 日間同一のクラスで実習したと回答したのは 10 名 (22.7%) だった。内訳は 0 歳児クラス 3 名 (6.8%)、1 歳児クラス 1 名 (2.3%)、2 歳児クラス 3 名 (6.8%)、3 歳児クラス 2 名 (4.5%)、4 歳児クラス 1 名 (2.3%) だった。

毎日異なるクラスで実習をしたと回答したのは 3/4 の 33 名 (75.0%) だった。

Table.3 実習クラスの乳幼児の年齢 人(%)

5 日間同じクラス	0 歳	3(6.8)
	1 歳	1(2.3)
	2 歳	3(6.8)
	3 歳	2(4.5)
	4 歳	1(2.3)
毎日異なるクラス		33(75.0)
無回答		1(2.3)

### 5) 通勤方法

学生が希望する実習先のほとんどは、自宅から至近距離にある園か、就職先として視野に入れている園である。このため通勤方法は、利便性のよい立地にある園であれば徒歩 (23 名) や公共の交通機関 (7 名) となるが、やむを得ず親の送迎 (19 名) に頼る場合や、望ましいことではないが自家用車 (9 名) で通勤せざるを得ない場合もある。

Table.4 通勤方法(複数回答あり) 人

公共の交通機関	7
親の送迎	19
徒歩	23
自家用車	9

### 6) 防寒着の準備

保育園では冬の外活動があるため、防寒着の準備が必要だが、「防寒着の上下は準備しましたか?」という質問に対して「準備した」と回答したのは 42 名 (93.3%) で、3 名 (6.7%) は「準備できなかった」と回答した。

### (2) 実習後について

#### 1) 礼状の送付

実習終了後 7 日以内に礼状を送付するよう指導している。8 割の 79.5% (35 名) は「発送した」と回答しているが、約 20% の 9 名が「まだ発送していない」と回答した。学生に対するマナー指導のあり方は、学科としての課題である。

#### 2) 日誌の回収

調査が実施されたのは、見学実習が終了した 2 週間後だった。調査日までに実習先から日誌が返却されたのは 19 名 (54.5%)、「まだ返却されていない」と回答したのは、約 40% の 24 名 (43.2%) だった。無回答は 1 名 (2.3%) だった。

まだ返却されていない学生に受け取り方法を尋ねたところ、「電話で確認の上、園に受け取りに行く」と回答した。

### (3) 感想 (自由回答)

#### 1) 困ったこと 辛かったこと、失敗したこと、指摘されたこと

##### ① 日誌、指導案、勤務表について

日誌や指導案の書き方は、6 月に実施される保育観察時から実習関連の授業等で実際に作成し、表現等の指導を受けているが、苦手意識をもっている学生は多いようだ。

実習の多くの園では、日誌は実習日翌朝の提出を求められている。園の配慮により園児の午睡時間中等に作成している学生もいるが、多くの学生は自宅に持ち帰っている。学校で習う記載方法と園の指導にはやや異なる部分があり、とまどいがみられることはあり、その場合は幼稚園や施設においても、実習先に従うよう指導している。学生は困難さを感じたようだが、今年度は全員が滞りなく日誌を

提出できていた。

Table. 5 日誌、指導案、勤務表について（自由回答）

<日誌の書き方>
<ul style="list-style-type: none"><li>・毎日 日誌を書かなければならないことが大変だった</li><li>・日誌の書き方が何も指摘されなかったので、これでよいのかと不安になった。</li><li>・日誌や指導案の書き直し、こどもへの対応が難しかった（2件）</li><li>・記録をもっと細かく書くこと（保育者の動き）を言われた</li><li>・日誌書きで「がつんと」という表現はよくないと指摘された</li><li>・日誌が苦手だったので、書くのが大変だった（4件）</li><li>・日誌の内容で、重点を置くところが分からなかった</li><li>・日誌で「促す」と書いたら、他の書き方が良いかも・・・と指摘をうけた</li><li>・子ども達が午睡中に日誌書きをしたが、その時間では終わらず、帰宅して書くことが辛かった</li><li>・日誌の誤字、時間のずれ</li><li>・日誌に書いた“保育者の怒り方”について、それを見てどう感じたかと聞かれた。（怖い思いをさせてごめんね）と言われた。</li><li>・日誌の不十分なことを教えてもらった。</li></ul>
<指導案>
<ul style="list-style-type: none"><li>・部分保育の指導案が、子どもの姿、保育者の様子、留意点を想像して書くのが難しかった</li><li>・指導案は、もう少し丁寧に細かく書くこと</li><li>・部分実習の指導案を2日前から保育者と相談し、検討し直した</li></ul>
<出勤簿>
<ul style="list-style-type: none"><li>・出勤簿について、どうしていいかわからなかった</li></ul>

## ②部分実習等

学生の 25%弱が部分実習をする機会を得られなかったが、自分から申し出ると実施できた学生もいたようだ。園側はある程度の準備をしてきていると考えていたり、クラスのようにすをみて保育者が実習生にやってみるか声をかけているようすもうかがえる。練習不足を反省した学生にとっては、今後の課題をみつける機会となっただろう。

Table. 6 部分実習等（自由回答）

<部分実習：技術面での不足>
<ul style="list-style-type: none"><li>・部分実習で手遊びをしたが、保育者のように上手く子どもたちを巻き込み、盛り上げることができなかった。</li><li>・手遊びは、みんなが知っているもののほうが楽しめるのかと悩んでしまった</li><li>・絵本を読んだ時のスピードが速くなってしまった。もっと読む練習が必要だった。</li><li>・絵本を読んだとき、子ども達が反応してくれたが、どう応えたら良いのか分からなくなってしまった。</li><li>・絵本や紙芝居を読むのが大変だった。</li><li>・絵本を読むときに「ゆっくり」と注意された</li><li>・ピアノ伴奏がうまく弾けなかった</li></ul>
<部分実習：急な対応にとまどう>
<ul style="list-style-type: none"><li>・「手遊び やってみる？」と直前に言われて困った</li><li>・「紙芝居と絵本、1冊ずつ 読んでみる？」と前日に言われ、あまり準備ができなかった</li><li>・お別れ会の出し物をしてほしいと当日に言われ、O×クイズを行った。</li></ul>
<部分実習：その他の反省と今後の課題>
<ul style="list-style-type: none"><li>・部分実習は、やりたい事を自分から申し出る形式だったが、クラスの一日の流れを把握していないといつ行えるかわからないので、しっかり聞いておけば良かった。</li><li>・発表会時期だったので、いつもの保育と流れが変わっていて、部分実習の時間が取れないことが多かった。</li><li>・部分実習はとても緊張したが、たくさんの課題が見つかった。</li></ul>

### ③園児への対応

子どもの発達段階に合わせた援助や対応の難しさを感じた学生や、子どもに対する園の援助方針を把握するまで戸惑いが多かった学生もいたようだ。

Table. 7 園児への対応（自由回答）

<p>&lt;発達段階に合わせた対応の難しさ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達段階をしっかりと理解すること</li> <li>・0歳児の対応が難しく、怖かった</li> <li>・未満児の日本語が聞き取れず、私に不満を伝えているが理解できなかった</li> <li>・子どもへの援助（年齢が上がるにつれ、手伝うのがいいのか自分でやる方向に向けたら良いか）が難しかった</li> </ul>
<p>&lt;対応やかかわり方の難しさ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児の男の子何人かに「おんぶ・・・」と抱っこをせがまれて、対応に困った</li> <li>・子ども達が沢山来てくれると、全員を相手にすることが難しく、実習生に対する接し方の受け止め方が難しい</li> <li>・「ここが痛い・・・」と言いに来る子どもへの対応に困った</li> <li>・泥まみれの子をおんぶしたのが辛かった・・・</li> <li>・テープ台を子どもに渡すのではなく、一枚一枚切ってテープを渡すこと</li> <li>・「0・1歳児にもっと関わって・・・」と指摘された</li> <li>・知っている子どもにも「くん」や「ちゃん」をつけるようにと指摘された</li> <li>・実習生だからどこまで注意してよいかわからず、優しい言い方しかできなかった</li> <li>・自分から積極的に子どもと関わったり、質問ができなかった（緊張や不安があった）</li> </ul>
<p>&lt;援助と見守りの見極めの難しさ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達をどこまで援助して良いか・・・に悩んだ</li> <li>・着替えが遅い子に声を掛けたら、逆に喜んでしまったので、声のトーンや声掛けの選び方が難しかった</li> <li>・どこまで援助していいのか、自分でできるから手伝わないと思われているのではないかなどと迷った</li> <li>・1・2歳児の昼食時、手が止まっていたので手伝ったところ、「自分でできるから大丈夫だよ」と言われた</li> <li>・1・2歳児の場合、実習生の立場としてどこまでやっていいか困った。おむつ交換は積極的にできた。</li> <li>・おむつ替えの時、未満児だったので、手伝おうとしたら、「自分ではなく練習をしているので」と言われた</li> <li>・5歳児は補助することが要らないので見守っていたが、見守るだけでいいのかと悩んだ。</li> <li>・給食の時間、私は早く食べることに精いっぱい、子どものスプーンの正しい持ち方や、食べるものが偏っている子への声掛けができなかった</li> <li>・見守るだけではなく、積極的に体を動かし 子どもと関わりながら学べる...と教えていただいた</li> </ul>
<p>&lt;その他（おむつ替え）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おむつの替え方がわからなく、指導してもらった</li> <li>・おむつの替え方（全部脱がせてから新しいおむつをはかせるのではなく、新しいおむつを上までギリギリ上げてから、古いおむつを破くと、すぐにはかせることができると学んだ）</li> </ul>

### ④安全・衛生面への配慮

現場の保育者が、どれほど乳幼児の安全面や衛生面に配慮しているのかを強く知る機会となった学生もいたようだ。調査では記載する学生はみられなかったが、実習中の昼頃に釧路周辺では震度3程度の地震があった。ほとんど気づかなかったという園も多かったというが、学生によっては災害時の教職員の動きや対応を学ぶ機会になったのではないだろうか。

Table. 8 安全・衛生面への配慮

<p>&lt;安全・衛生面への配慮&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達の全体を見る位置に座ること、・・・と指摘された</li> <li>・膝の上にのせるのは少し危険があるし、死角も増えると言われた</li> <li>・スリッパを子どもに貸した事で、ケガの恐れがあったことがわかり、失敗した</li> <li>・子どもが抱っこでとび乗ってきたとき、手を離れたことが失敗した</li> <li>・アレルギーを持つ子の給食の配膳についてどう動くべきか、わからない場面があり、困った</li> <li>・保育者がいなくなった時、私も見ていなくて、ケガ（顔に傷）をした子がいた</li> <li>・失敗として、テーブルの布巾で床を拭いたり、アレルギーのこどもの椅子やテーブルをアレルギーのない子のタオルで拭いたり、トイレにスリッパで入らず上靴のまま入ったりと沢山の失敗をした。</li> </ul>
---

### ⑤園児同士のトラブル対応

幼児のトラブル対応については、これまで授業の中でケース検討することもあったが、学生は実践の場では難しさを感じていた。力不足を感じながらも、同時に保育者の対応から学ぶよい機会となったことに感謝するようすがここでもみられる。

Table. 9 園児同士のトラブル対応

<園児同士のトラブル対応>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ケンカが起こった時の対応が うまくできなかった (3件)</li><li>・けんかやおもちゃの取り合いを止めたが、2歳児には通用しなかった</li><li>・おもちゃの取り合い、けんかをした際に子どもたちが後味の悪い終わり方にならないよう導くのが難しかった</li><li>・物の取り合いの時、どう対応すべきか困った</li><li>・喧嘩の仲裁や、その後の対応の仕方が、素早く出来なかった</li><li>・特別な配慮が必要な子ども達への対応や、こどもたち同士のトラブルへの対応が難しかった</li><li>・子ども同士が言い合いになった時、解決する事が出来ず、保育者に助けていただいた</li><li>・こどものケンカが目の前で起きていることに気づかずにいたこと</li><li>・異年齢の喧嘩の仲裁が難しくどのように声をかければお互いが納得して終われるのか分からず時間がかかった。先生から、子どもの言動の意図を分かってあげるのが大切と教えていただいた。</li></ul>

### ⑥教職員から受けた指導等

あいさつ等のマナーの面で注意を受けて反省をしたようすがみられる。もっと積極的に手伝いを申し出ればよかったという反省とともに、申し出るタイミングをつかむことが難しかったという学生もいた。現場のスピードや雰囲気についていけなかった学生がいたことも推測できるが、そういったことに慣れるという意味でも、本実習前の観察実習や見学実習は学びの場となっているのだとも考えられる。

Table. 10 教職員から受けた指導等

<教職員から受けた指導>
<ul style="list-style-type: none"><li>・元気がない、挨拶を忘れて...との助言をもらった (2件)</li><li>・園のルールがわからなく、注意されてしまった。</li><li>・言葉使いを注意された</li><li>・「手伝うことはありませんか？」と聞いたほうが良いと、アドバイスをいただいた</li><li>・他の学生には言われず、自分だけきつく言われたことがわからなかった。</li><li>・人数分用意できなければ出さない、「実習生として」を忘れない、など、この先生が何を求めているのか想像できなかった</li></ul>
<教職員への手伝い>
<ul style="list-style-type: none"><li>・どのタイミングで保育者の手伝いをすればよいのか、困った</li><li>・先生たちが片付けや準備をしているのに、子どもと同じタイミングで給食を食べてよいのかと悩んだ</li><li>・先生の手伝い(おやつ準備、テーブルの片付け)をしたほうが良いのか、子どもと遊んでいたほうが良いのかが、わからなかった</li><li>・もっと積極的に先生にできる事(手伝い)がないかを聞くべきだった</li></ul>

### ⑦その他

今年度の実習期間は悪天候や気温の低い日が多かったため、通常は子どもの外遊びの機会を多く提供していても、この期間は外遊びの機会が少なかったという園もあった。

また、実習中には災害警報が出て管内の学校が休校になった日はあったが、保育園は福祉施設であるため、実習先は1園を除いて通常通りの保育を行っていた。このため実習も予定通り行われていたため、「通勤に不安を感じた」という声もあった。通常通り学生の実習を行うことの是非については今後議論の余地があるが、学生にとっては保育園がもつ社会的責任について考える機会になったともいえるだろう。

Table. 11 その他

<p>&lt;実習中の健康管理&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寝不足で具合が悪くなった</li> <li>・風邪をひいてしまい、体調管理が不十分だった</li> <li>・実習で疲れたあとに日誌を書く日が続いて睡眠時間が短くなったこと</li> <li>・実習中、日誌を書く時間が足りなく、睡眠時間がとても短かったのが辛かった</li> </ul>
<p>&lt;給食&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・給食が食べられなかった</li> <li>・給食は、好き嫌いが多かったので辛かったが、毎日頑張って完食した。</li> </ul>
<p>&lt;交通機関&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バスで園に行くことが大変だった</li> <li>・バスで通勤していたので、悪天候の日は遅刻しないかと不安で仕方がなかった</li> </ul>
<p>&lt;その他&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・正座をするのが、とても辛かった（2件）</li> <li>・製作した「自己紹介」ができなかった</li> <li>・あまり指摘されず、ほめられることが多かったから、本当にそれが正しかったのかと逆に不安になった</li> <li>・子ども達の名前を早く覚えたかった</li> <li>・緊張から 声がカスカスになった</li> <li>・最初は不安で緊張したが、知っている先生が多くて安心でき、楽しめた。子供たちの名前を全員覚えた。</li> <li>・外遊びが多いと聞いていたのだが、一度も外遊びをしなかった</li> </ul>
<p>&lt;今後に向けて&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな保育方法を学ぶことができたので、今後に生かしていきたい。</li> <li>・環境保育の大切さに気付くことができた</li> </ul>

2)楽しかったこと、褒められたこと、自信がついたこと

①日誌等について

Table. 12 日誌等について（自由回答）

<p>&lt;日誌&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日が楽しく幸せだった。日誌の書き方に不安があったが、丁寧にかけているねと言われて嬉しかった</li> <li>・日誌が丁寧に書かれている・・・と言われたこと</li> <li>・日誌のコメントで、「実習の姿勢にとっても感心した」と言って頂き、自信に繋がった</li> <li>・日誌の所見のほかに、先生から たくさん アドバイスを頂いたこと</li> </ul>
<p>&lt;その他、記録等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・字がきれいと言われた</li> <li>・メモを取ることを褒められた</li> </ul>

②部分実習等について

Table. 13 部分実習等について（自由回答）

<p>&lt;部分実習&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部分実習での絵本の読み聞かせ</li> <li>・部分実習（絵本）をほめられ、嬉しかった（4件）</li> <li>・部分実習は、「子ども達の声に反応しながら読んでいてよかった」と言われ嬉しかった</li> <li>・絵本の読み聞かせを2回し、子ども達から「面白かった」と言ってくれ、自信につながった</li> <li>・子ども達に沢山 絵本を読むことが出来た事</li> <li>・ペープサートクイズをして子どもの興味をひきつけられた。絵本の後のまとめを練ることの大切さ、流れも良かったと褒められたことが嬉しかった。</li> <li>・紙芝居を急ぎょ読むことになったが、部分実習3回目だったので 役になりきって読み、保育者に「いいね！」とほめられ、達成感がすごく上がった</li> <li>・間をもたせる為に、突然やった動物の物真似が好評だった</li> <li>・ピアノの演奏を褒められた、間違えた時も止まらずに弾いた</li> <li>・子ども達と一緒に歌を歌うのが楽しかった</li> </ul>
<p>&lt;自己紹介&gt;</p> <p>自己紹介が良かったとほめられた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介での工夫を褒められた・</li> <li>・自己紹介を保育者の方々に褒めていただいた</li> </ul>

### ③園児とのふれあい、かかわり

Table. 14 園児とのふれあい、かかわり

<p>&lt;自由遊び&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子ども達と転がしドッジボールが楽しかったこと、子ども達とたくさん話せた事</li> <li>子ども達と沢山話し、遊べた事が楽しかった。(6件)</li> <li>自由遊びで、おもちゃを通してたくさん遊んだ事、戸外で雪遊びやそり遊びができて楽しかったこと</li> <li>体を使った遊びを沢山した事</li> <li>子ども達とのお尻鬼ごっこ、外での追いかけてごっこが、楽しかった</li> </ul>
<p>&lt;子どもとのふれあい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子ども達が積極的に来てくれたので、自分も少しずつ積極的になっていけたのが良かった。うれしかった。</li> <li>子ども達と触れ合えたこと</li> <li>たくさんの子どもと関わり、仲良くでき、充実した5日間を過ごせた</li> <li>声かけや、対応のレパートリーが増えた事</li> <li>人見知りの子が最初は関わってもらえなかったけれど、最後の日は一緒に遊ぶことが出来た事</li> <li>子どもとの接し方に不安があったが、自然と会話をしたり遊んだりできたと思うので、少し気が楽になった</li> <li>実習の最終日に、ずっと私のそばにいた男の子のお母さんから「ありがとうございました。毎日、楽しそうにしています...」といわれた。男の子が、家で、保育園であった出来事を母に伝えて、私の存在も知ってくれたんだと思うと、本当にうれしかった。</li> <li>子ども達に「読んで～」と持って来られた絵本を読むと、とても喜んでもらえ、自信につながった</li> <li>未満児と関わることができ良かった</li> </ul>
<p>&lt;子どもに励まされた&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子ども達に自分の名前を憶えてもらえたこと(4件)</li> <li>沢山の子が遊びに誘ってくれた(2件)</li> <li>毎朝、子ども達が元気に声をかけてくれたこと</li> <li>半日実習に行っていたことを憶えていた子がいて、手を引いて遊びに誘ってもらい嬉しかった</li> <li>先生が一番キラキラしていてかわいい・・・と言われてうれしかった</li> <li>子どもに大好きといわれたこと</li> <li>5歳クラスの男の子にプロポーズを受け、残りの実習を頑張れた事</li> <li>2歳児は人見知りが多いかと思ったが、初日から「先生遊ぼう、先生見て、今日も来てくれた...」と話しかけられ嬉しかった</li> <li>大きくなったら○○先生になるのと言われたこと、お手紙や似顔絵を描いてくれたこと</li> <li>子どもに、「また来てね」と言われたこと</li> </ul>

### ④教職員から受けた指導等

Table. 15 教職員から受けた指導、配慮、かかわりなど

<p>&lt;教職員から受けた配慮、かかわり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実習最後の日、先生や子ども達が玄関まで見送りをしてくれて 嬉しかった</li> <li>子ども達も先生たちもみな優しく実習しやすい環境だった</li> <li>先生が優しくしたこと</li> <li>先生の年齢が若く、親身になって話を聞いていただいたこと</li> <li>先生方とお話できたこと</li> </ul>
<p>&lt;教職員からほめられたこと：技術等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>おむつ替えが上手と褒められた事</li> </ul>
<p>&lt;教職員からほめられたこと：子どものかかわり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「穏やかに声をかけられているね」と言われたこと</li> <li>子どもへの対応や声掛けが良いと褒められた(2件)</li> <li>子ども達に沢山声をかけていたことが良い、...と言われた、</li> <li>笑顔が良い、子ども達の名前を覚えるのが速いと褒められた。</li> <li>先生から「笑顔や元気がいっぱい良いね」と言われ、自信になった</li> <li>副園長先生から、「真面目にやってくれ、成長が楽しみ、期待していますよ」と言われ、自信になった</li> <li>「笑顔と声のかけ方が良かった」と言われ、とても嬉しかった</li> <li>「子ども慣れしているね」と言われたが、日頃のボランティアのおかげかな...と思った</li> <li>子どもとの関わり、日誌の書き方、実習生同士の中の良さ、を褒めていただき嬉しかった</li> <li>日誌の書き方、子ども達の輪に入る姿勢や接し方を褒められた</li> </ul>

## ⑤その他

Table. 16 その他

<p>＜実習中の意欲・態度＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・落ち着いて行動できているね・・・と言われたこと</li><li>・前日、「明日はこうしようと思ったこと」を次の日に挑戦し、結果を必ず出せたのが良い、とほめられた</li><li>・「こどもの様子をよく見ている」と言われたこと</li><li>・先生に子どもの話を聞こうとする姿勢をほめられ、とても自信になった</li><li>・先生方に笑顔を褒められたこと</li><li>・先生方の行動や言葉がけをまねしたことが褒められた（午睡の時）</li><li>・子どもたちの名前を憶えて呼んでいたら ほめられた</li></ul>
<p>＜雑務等の仕事＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・保育者が、普段行っている保育室の掃除などを経験したことや、気を付けていることを学べた</li><li>・掃除の流れを少し覚えていたので進んでやったら、“助かる、ありがとう”と言われた</li><li>・いろいろな仕事を任せられ、うれしかった</li><li>・仕事をやり続けたほうが楽だった</li><li>・何をしたらいいのか聞くと、ぼーっと立っているだけにならないからよかった</li></ul>
<p>＜今後に向けて＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・周りをよく見て、行動することができたので、これからも自主的に行動することを心がけたい</li><li>・地震が起きた時の対応の仕方や言葉かけを学んだので、次に地震が発生した時は対応できると思う</li></ul>
<p>＜その他＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「今回の実習生、レベル高いね」と言われたこと。</li><li>・保育園の先生方に「頑張ってるね」と言われたこと</li><li>・一日の保育を観察できたこと</li><li>・毎日が楽しかった（2人）</li><li>・実習中、ずっと明るく元気でいられたこと</li><li>・笑顔で接していたこと</li><li>・指摘されたことをすぐに理解し、次に直すことが出来た事</li><li>・毎日楽しく子ども達と過ごし、先生達にもよくしていただいたこと</li><li>・子ども達が可愛かった</li></ul>

## 4. 保育園見学実習の成果と今後の課題

失敗や指摘を重ねながら、学生が現場では学びの連続だったことが、学生の記述からも想像できる。

見学実習を前にして学生が抱えていた不安とは、子どもへの適切な対応、保育者とのかかわり、日誌や指導案の作成に関することだった。学生は秋の「観察実習」から「保育者の手伝いと、子どもを見ることのどちらを優先するべきなのか」「手伝いや質問のタイミングがわからない」といった悩みや不安を口にしていった。教員はその生真面目さをほほえましく感じながらアドバイスをし、不安を感じるのは向上心のあらわれなのだと伝えることもあった。同時に「日常の学生生活では、実習や就職に備えてしっかり学ぶように」と伝えていた。5日間の実習で、学生は自分の身につけるべき学びや課題、スキルに気づいたようだった。それらが今後の学校生活での学びのモチベーションになるならば、見学実習の意義は十分にあると考えられる。ただ、「子どもとのかかわりが楽しかった」「保育者に親切にかかわっていただいた」という、楽しい思い出を残したというだけにとどまらないためにも、指導者側も折々にそのことを想起させ、学びへのモチベーションをもたせていきたい。

ある巡回先の園長先生は「この実習では、あまり厳しいことを言うつもりはない。まずは子どもたちとたくさんかかわって、保育園の楽しさや仕事へのポジティブな面を見てほしい。」と言った。気づいている学生もいるようだが、そのような現場の教職員の想いや配慮のもとで実習が行われていることも学生には伝えたい。

## ＜文献＞

全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会編（2020）. 保育実習ガイドライン（第4版）（施設実習編）

# 学生は施設実習で何を学び得るのか —本学科における実習後のアンケート結果から 第2報—

穴水ゆかり<sup>i</sup> 岩野布美子<sup>ii</sup> 篠木真紀<sup>iii</sup> 白川和希<sup>iv</sup> 進藤信子<sup>v</sup> 吉川修<sup>vi</sup> 井上薫<sup>vii</sup>

## 1. はじめに

前報『釧路短期大学幼児教育学科実践報告第2号』にて報告した「学生は施設実習で何を学ぶのか 本学科における実習後のアンケート結果から—」では、本学2年生に対して行ったアンケートの結果をもとに施設実習の成果と課題について検討した。本報告はその第2報である。前報に引き続き、施設実習の成果と課題について検討することを目的とする。

児童福祉法第十八条の四において、国家資格である保育士とは「専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」と位置づけられている。保育士は保育所のみならず、施設で生活する子どもの養護にも関わる専門性を有している。

「施設実習」は、その保育士資格取得の必須条件である「保育実習」の一環として必須となっており、「10日間以上かつ、80時間以上」の期間が義務付けられている。『保育実習ガイドライン（第3版）（施設実習編）』ではその目的について、「福祉施設に参加実習することによって入所（利用）児童・者の生活、施設の運営・活動、保育士の職務内容・役割、福祉施設の目的・機能等を体験的に学習する。」と記載されている。

Table.1 保育実習実施基準 第2 履修の方法

実習種別 (第1欄)	履修方法 (第2欄)		実習施設 (第3欄)
	単位数	実習における おおむねの 実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	4 単位	20 日	(A)
保育実習Ⅱ (選択必修)	2 単位	10 日	(B)
保育実習Ⅲ (選択必修)	2 単位	10 日	(C)

Table.2 本学のカリキュラムによる保育実習実施基準

実習種別	履修方法 (第2欄)		実習施設
	単位数	おおむねの 実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	2 単位	10 日	保育所
保育実習Ⅱ (必修科目)	2 単位	10 日	保育所
保育実習Ⅲ (必修科目)	2 単位	10 日	福祉施設
保育実習Ⅳ (選択必修)	2 単位	10 日	福祉施設

<sup>i</sup> 幼児教育学科専任講師   <sup>ii</sup> 幼児教育学科教授   <sup>iii</sup> 幼児教育学科専任講師   <sup>iv</sup> 幼児教育学科専任講師  
<sup>v</sup> 幼児教育学科教授   <sup>vi</sup> 幼児教育学科准教授   <sup>vii</sup> 幼児教育学科教授

Table.3 保育実習実施基準 第2 履修の方法 備考1

<p>第3 欄に掲げる実習施設の種別は、次によるものであること。</p> <p>(A) ...保育所及び乳児院, 母子生活支援施設, 児童養護施設, 障害児入所支援施設, 児童発達支援センター(児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る), 障害者支援施設, 指定障害福祉サービス事業所(生活介護, 自立訓練, 就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る), 情緒障害児短期治療施設, 児童自立支援施設, 児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園</p> <p>(B) ...保育所</p> <p>(C) ...児童厚生施設又は児童発達支援センターその他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの(保育所は除く)</p>
--

実習Ⅰは、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長より通知された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について(平成27年3月31日)」の中の「保育実習実施基準」において定められている(Table.1及びTable.3)。Table.1の通り4単位だが、Table.3の(A)で示されている通り、保育所での実習おおむね10日(2単位)および乳児院等での実習おおむね10日(2単位)を実施することが必要である。本学のカリキュラムでは、Table.2で示す通り、本学のカリキュラムでは保育実習実施基準による「保育実習Ⅰ」を分割している。これは「保育実習Ⅰ」及び「保育実習Ⅲ」に相当する。本学における「保育実習Ⅰ」とは、1年次の1月末に見学を主体とした実習を保育園で実施するものである。さらに『保育実習実施基準』では「保育実習Ⅲ」、本学では「保育実習Ⅳ」に相当する選択必修の施設実習については、児童館や放課後児童デイサービス等において希望者が履修することになるが、履修希望者は0名の年も多い。

必修科目としての本学の施設実習(必修)である「保育実習Ⅲ」については、乳児院等をはじめとする児童福祉施設等への実習が必修科目として設置されているが、保育所に比較して、児童福祉施設の設置数は限られている。このため、本学の学生は大半が子どもとかかわる保育者を目指しているが、例年、半数以上が発達支援や児童養護にかかわる施設ではなく、成人を対象とした障害者施設で施設実習を行っており、今年度も本学の学生では約6割が成人を対象とした障害者施設で実習を行った。また、市街地にある障害者施設は少ないために、自転車や保護者の送迎によって通う学生や、遠隔地にある実習先を選択する学生、近隣の町に居住していても通うことが難しいために、実習期間中は施設に宿泊をする学生も例年みられる。

実習先が成人を対象とする福祉施設である学生の数が、児童福祉施設で実習をする学生を上まわり、遠隔地での実習を余儀なくされる原因としては、他の養成校との期間重複も挙げられるが、養成校としては施設との連携強化や、受け入れ先の拡充も課題である。また、近年は、四年制大学の保育士養成校が拡大し、指定保育士養成施設の半数以上が四年制大学となっている中で、短期大学において質の高い保育士の養成を課される本学が、具体的にどのような教育を学生に提供していくのかという問題は、常に再考と検討を重ねるべき課題となっている。

施設実習の事前指導に際して、本学では学生が施設実習を通して受けた指導や体験から、これまで授業で学んだ知識や技術、技能等の中から自身にとって不足している点に気づき、さらなる学習意欲を呼び起こす機会となることを目標としている。事後指導や授業についても、その学習意欲に応えることが指導者側に求められているものと考えている。

しかしそのほとんどは各授業の担当者に委ねられており、実習にかかわる演習授業で施設について学ぶ時間は、幼稚園や保育所実習に較べると非常に少ない。具体的には、保育士資格取得にかかわる実習関連科目は、1年生では「実習内容研究Ⅰ」「教育保育実習指導」、2年生では「実習内容研究Ⅱ」と、学生は最低3科目を履修することになっている\*1。

これら3科目の中で学生が施設や施設実習について学ぶ機会について、シラバスをもとに説明すると、1年生には「教育保育実習指導」の授業枠には新入生のオリエンテーション旅行としての意味合いを持つ、1泊2日の施設研修旅行でその機会が用意されている。児童養護施設、障害児入所支援施設、障害者入所支援施設の3施設を訪問し、障害児・者施設では入所児・者とレクリエーションを通じた交流を行っている。帰校後には学生同士のグループでその振り返りを行う。この他には、施設実習を終えた2年生の「施設実習報告会」に参加するが、ほとんどの1年生は各施設の概要等をまったく把握していないため、実習担当教員が事前に、次年度に実施される施設実習の希望先選定の説明を兼ねて、施設の概要等を説明している。

つまり、1年次で施設について学ぶ機会は「施設見学」「研修旅行の反省」「実習先の希望調査にかかわるガイダンス」「施設実習報告会」のみとなっている。2年生では、「実習内容研究Ⅱ」の中で、施設実習にあたっての注意点等について説明する「実習前ガイダンス」、施設職員による「実習講演会」、実習後の「施設実習報告会」が行われている。

以上の状況により、施設でのボランティア経験をもつ学生や、ごく一部である施設保育に関心のある学生以外は、実習先に対するイメージすらあまり持つことができないまま実習に臨んでいる。こうした状況の中で、学生は利用児・者とのかかわりや現場の指導から、何を学び得て、今後の学びにつながる問題意識や学習意欲をどれだけの得ているのだろうか。

2年間という短い期間の中で専門職を養成するという現状では、時間枠を増やすことは難しいが、授業や指導の内容を精査することは可能であると考えられる。以上の問題意識から、本報告では学生へのアンケート調査をもとに本学における実習指導のあり方について再考し、検討を加えることを目的とする。

## 2. 調査方法

質問項目は学生や実習の状況に合わせて、前年度のものから精査した。

本調査は2019年8～9月に行われた施設実習に参加した本学幼児教育学科2年次の学生名(男子1名、女子46名)を対象とした。

2019年10月、施設実習終了後の実習関連の授業時に自記式質問紙調査用紙を配布し、教務学生課に設置されたボックスに提出するよう指示した。45名から回収された(回収率97.8%)。

Table.4 学生の実習先と施設種別

施設種別	施設名	人数(%)
児童養護施設	A	1 (2.2)
	B	4 (8.7)
	C	1 (2.2)
	小計	6 (13.0)
児童発達支援センター	D	3 (6.5)
	E	1 (2.2)
	小計	4 (8.7)
障がい児入所施設	F	3 (6.5)
障がい者入所施設	G	6 (13.3)
	H	2 (4.3)
	I	6 (13.0)
	J	8 (17.4)
	K	4 (8.7)
	L	5 (10.9)
	M	2 (4.3)
	小計	33(71.3)
		46(100)

実習先の施設種別と実習者数は Table.4 の通りである。児童養護施設で、は A の受け入れ対象は乳児、B と C は幼児以上を受け入れている。約 7 割の学生の実習先は成人者を対象とした障がい者支援施設だった。

実習調査内容については資料に示す。

### 3. 調査結果

#### (1)実習先の保育者（指導者・職員）について

##### 1)保育者の指導について

ほぼすべての学生が、わからないこと等があったときには「実習施設の職員に質問することができた」と回答した (Table.5)。「あまり質問できなかった」と回答した 1 名は、その理由を「担当保育士と勤務時間が異なることが多かったから。」と説明した。

Table.5 実習施設の職員にわからないことを質問できたか (%)

	訊けた	だいたい訊けた	あまり訊けなかった
児童養護施設	5(83.3)	0(0.0)	1(16.7)
発達支援センター	2(50.0)	2(50.0)	0(0.0)
障がい児入所施設	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)
障がい者入所施設	25(78.1)	7(21.9)	0(0.0)
計	33(73.3)	11(24.4)	1(2.2)

##### 2)施設による利用児・者情報の教示について

実習中の学びを深める上で、利用者情報は貴重である。プライバシーの問題はもちろん、知識が十分ではない学生に対してどこまで利用児・者について伝えるべきなのかという判断の難しさも推察されるが、Table.6 の通り、ほぼすべての学生が利用児・者に関する情報や説明を受けていた。

Table.6 利用児・者情報を教えていただくことができたか 人(%)

	教えていただいた	だいたい教えていただいた	あまり教えていただけなかった	まったく教えていただけなかった
児童養護施設	4(66.7)	1(16.7)	1(16.7)	0(0.0)
発達支援センター	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)
障がい児入所施設	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	25(80.6)	6(19.4)	0(0.0)	0(0.0)
計	30(69.8)	12(27.9)	1(2.3)	0(0.0)

##### 3)保育者からの声かけ

「職員に励まされたことやうれしかったこと」(Table.7)からは、学生は保育士のみならずさまざまな立場の施設職員から、緊張や不安などの想いを理解され、気遣われながら実習を進められていったようすがうかがわれた。

施設実習では日常の生活や活動を通してさまざまな利用児・者とかかわり、また、ひとつのフロアや寮、教室等に滞在することによって一人一人とかかわりをもつことになる。このため、授業やイベント時のボランティア活動では気づけなかった、利用児・者とかかわり方や特性などへの疑問等について現場で話を聞き、助言を受けることが貴重な学びの時間となる。また、この項目に対する回答

からは、慣れない現場での緊張や戸惑いを理解して、学生の話や相談に耳を傾けていただいた感謝の気持ちが読み取れる。さらに自分の仕事ぶりや長所を評価され、努力や成長を認められることにより、実習に対するモチベーションが上がったようだ。学生の多くは知識や技術が不足していると自覚しながらも、保育士や職員に対する感謝の気持ちをもって、真摯に実習を行おうとしていたようすがうかがえる。

Table. 7 職員の方に励まされたこと、うれしかったこと（おもな回答）

<p>〈指導のあり方〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特徴を理解して指導して下さったこと。（施設 C）</li> <li>・色々なことを詳しく教えていただいたこと。（施設 E）</li> <li>・具体的に、私の考えのここが良いということや、指導の中で褒めてくださったこと。（施設 M）</li> <li>・利用者に関わる中で細かくていねいに接し方やどのような配慮が必要か教えていただいたこと。（施設 K）</li> <li>・利用者の方と関わる上でのアドバイスを細かくしてくれて、次の日からの実習が行いやすくなった。（施設 J）</li> <li>・介助は上手にできなくても丁寧にできれば良いと励まされた。（施設 J）</li> <li>・利用者さんのことを質問したら、1～10 まで詳しく学ぶことができました。また、笑顔が多く、やさしい人たちが多く過ごしやすかったです。（施設 G）</li> </ul>
<p>〈職員からかけられた具体的な言葉〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「明るく常に笑顔で積極的に子どもたちと関わっていたので、早く子どもたちに安心感を与えることができていた。子どもたちと関わるのが上手な人だと思った。」（施設 A）</li> <li>・「子どもたちが『安心できる人』『一緒に遊んでくれる人』と認識していた。子ども達と真っ直ぐに接している態度がよい。」（施設 D）</li> <li>・「子どもたちとの関わり方を工夫していた」「学園になじんでいた。」（施設 F）</li> <li>・「いきいきしていて良いね!」と言われたこと。（施設 I）</li> <li>・作業の際に「上手」とほめられたこと。（施設 I）</li> <li>・「利用者さんとの関わり方が上手」だと言われたこと。（施設 I）</li> <li>・利用者さんの行動について相談したら「誰にでもする行動じゃないよ、良かったね」と言われた。（施設 H）</li> <li>・援助をしている際に、「この仕事向いている」と言われたこと。（施設 H）</li> <li>・積極性や挨拶をほめられた。（施設 J）</li> <li>・「積極的に関わっていた」（施設 J）</li> <li>・「すごい慣れてるね」と言われた時。（施設 J）</li> </ul>
<p>〈職員による気遣い・配慮〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・優しく接してくれる保育士の方もいた。（施設 B）</li> <li>・とてもやさしく親しく接していただき、とてもたのしくうれしかった。（施設 K）</li> <li>・部屋のことなどとても気を遣って声をかけてくれた。（施設 I）</li> <li>・手伝いをしたらありがとうと言ってくれたり、たくさん話をしてくれて不安がなくなりました。（施設 G）</li> <li>・たくさんいろいろな話を聞いてくれたり話しかけたりしたことが一番の励みになった。（施設 G）</li> <li>・ひとりひとりの職員が親切だった（施設 G）</li> </ul>
<p>〈その他〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終日に、とてもよい実習生でした、と泣いてもらいました。（施設 B）</li> </ul>

(2)実習前後での気持ちの変化と就職について

1)施設勤務の保育士になりたいと思ったか

Table.8 及び Table.9 は「施設実習前と実習後で、施設の仕事に対する気持ちは変化しましたか」との質問に対する回答である。Figure.1 はそれらをグラフに表したものである。

もとより本学の学生の大半が、幼稚園教諭や保育所保育士を志して入学していることもあり、Table.8 とおり、就職先として施設保育士に関心をもって実習に臨む学生は、例年数名程度である。今年度は「どちらかというとなりたい」と回答した学生 1 名で、約 7 割の学生が「あまりなりたくない」「なりたくない」と回答している。

Table.8 実習前の施設の仕事への意識

	人(%)				
	とてもなりたい	どちらかというとなりたい	どちらでもない	あまりなりたくない	なりたくない
児童養護施設	0(0.0)	0(0.0)	3(50.0)	2(33.3)	1(16.7)
発達支援センター	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)
障がい児入所施設	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	2(66.7)
障がい者入所施設	0(0.0)	1(3.3)	7(23.3)	8(26.7)	14(46.7)
計	0(0.0)	1(2.4)	12(28.6)	12(28.6)	17(40.5)

Table.9 実習後の施設の仕事への意識

	人(%)				
	とてもなりたい	どちらかというとなりたい	どちらでもない	あまりなりたくない	なりたくない
児童養護施設	2(33.3)	1(16.7)	2(33.3)	1(16.7)	0(0.0)
発達支援センター	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)
障がい児入所施設	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	0(0.0)	1(33.3)
障がい者入所施設	6(19.4)	13(41.9)	9(29.0)	2(6.5)	1(3.2)
計	9(20.9)	15(34.9)	14(32.6)	3(7.0)	2(4.7)

しかし Table.9 のとおり、実習後には約 55%の学生が「なりたい」「どちらかというとなりたい」と回答している。実習後に施設の仕事に対する意識が向上していた学生は 76.7%、変化がなかった学生は 20.9%で、低下した学生は 1 名(2.3%)のみだった。

例年、実習後に「とてもなりたい」と回答した学生の数に較べて、実際に施設保育士とした就職する学生の数は少ないが、この回答は、施設や施設の仕事に対する学生の抵抗感の低下、ポジティブな印象や感情等の向上を表すものと捉えられるのではないだろうか。

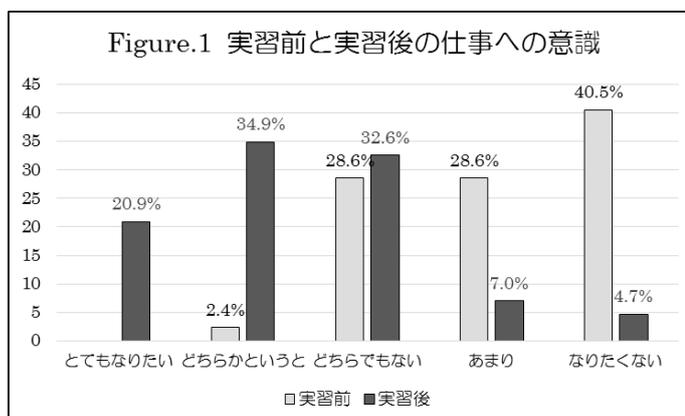


Table.10 に示した通り、実習前後で意識が変容した理由として、70%近くの学生が「施設の雰囲気良かった」、約60%が「利用児・者との関わり」「自分の成長を感じ、自信がついた」と回答した。施設種別による内訳をみると、成人を対象とした障害者入所施設での実習した学生では81.3%が「実習施設の雰囲気がよかった」と回答し、「利用者とのかかわりが楽しかった」68.8%だった。発達支援センターで実習した学生は4名と少ないため、単純には比較できないが、それぞれ50.0%、75.0%と、障害者入所施設同様に満足感が高かった。

一方で「自分の成長を感じ、自信がついた」と回答したのは、障害者入所施設の実習生は28.1%にとどまり、発達支援センターで実習した学生では半数の50%だった。障害者入所施設で実習した学生は、利用者とのかかわりを楽しんできたが、必ずしも学びや成長についての実感があるわけではないといえる。ただし、実習前には73.4%が就職をしたくないと回答していることから、約10日間の体験・経験によって障害者に対する見方や感じ方に変化があったのだとすれば、実習の意義は大きいものだったと考えてよいのではないだろうか。

Table.10 施設実習前後で意識が変容した理由

(複数回答あり) 人(%)	
実習施設の雰囲気がよかった	30(66.7)
実習施設の職員が魅力的だった	28(62.2)
利用児者とのかかわりが楽しかった	27(60.0)
自分の成長を感じ、自信がついた	13(28.9)
実習施設の雰囲気が好きではなかった	2(4.4)
実習施設の職員が魅力的ではなかった	0(0.0)
利用児者とのかかわりがつらかった	1(2.2)
施設での仕事に自信をもてないと感じた	0(0.0)
その他	0(0.0)

### (3)実習を経験して

#### 1)実習に行ってもよかったと思うこと

事前指導では、保育園や幼稚園で障がいのある乳幼児とのかかわりや援助について考えるうえでも学ぶべきことが多いと伝えていた。Table.11にみられる通り、利用児・者自身や、彼らとのかかわりを通じての学び、施設や障害に対する学びなど、体験や経験を通じた学びに関する記述は多くみられた。しかし、実践報告第2号掲載『学生は施設実習で何を学ぶのか』にある昨年度の実習生と較べると、今年度は施設実習を通して施設保育士の働き方や役割、専門性を認識して職場や職務に魅力を感じたという意識の変化や、学んだことを今後どのように活かしていきたいのかといった記述はあまりみられなかった。

Table.11 実習に行ってもよかったと思うこと (主な回答)

〈利用児とのかかわりと、かかわりを通じた学び〉
・子どもたちが想像以上にきてくれて、子どもから「○○しよ！」と中学生・高校生の子も言ってくれたり、わからないことはすぐ周りが助けてくれました。(施設B)
・子どもと関わるのが楽しかった。(施設B)
・たくさん子ども達と関わる事ができました。(施設D)
・利用児との関わりに苦しさがあったが見方が変わった。子どもの捉え方が変わり、保育の幅が広がった。(施設D)

---

#### 〈利用者とのかかわりと、かかわりを通じた学び〉

---

- 重度の自閉症スペクトラムの利用者が、カードで行動を指示され動いていたため、関わる機会がありませんでしたが、最終日の 2~3 日前程に、手を振ってみると振り返ってくれて、些細なことですが感動しました。（施設 M）
- 「怖さ」という気持ちがあり、利用者の方と関わるができるか不安や焦りがありました。ですが、職員の方々はもちろん、利用者の方はとても優しく、お話することが大好きな方が多いため、救われた場面があり、「怖さ」というものが楽しくなりました」（施設 K）
- 成人の障がい者と関わった。価値観が変わった。（施設 K）
- 利用者さん、ワークセンターの人と交流できたこと。（施設 I）
- 利用者さんと多く関わる事ができた（施設 I、施設 J）
- ふだん関わる機会がない方と関わる事ができた。（施設 J）
- 利用者さん怖いと思うことが多かったのですが、実際実習に行くと関わる事が楽しかった。（施設 J）
- 保育士の行動・声かけをみる事ができた。（施設 I）
- 人と関わる事が苦手な利用者さんや会話が成立しない利用者さんが笑顔を見せてくれた時。（施設 G）
- 利用者さんと関わる事ができてとても楽しかった。（施設 H）
- 利用者さんがとてもよい人たちが毎日が楽しかったです。入浴介助を行ったことでさらに話しやすくなりました。（施設 L）

---

#### 〈施設や障害に対して学んだこと〉

---

- 幼稚園や保育所、学校の授業では学べないことをたくさん学ぶ事ができた。今、現在で様々な背景を抱えている家庭が多くあることを知れた。（施設 A）
- 施設の人たちとの関わり方を学べたこと。（施設 C）
- 障害をもっている子との関わり方や介助法がたくさんあることを知れた。（施設 F）
- 重度の障害の方への接し方が学べてよかった。（施設 K）
- 障害のある方への対応の仕方を学ぶ事ができて大変勉強になりました。（施設 K）
- 施設の印象が変わった。（施設 I）
- 職員の方がとても優しく、障害をもった方についてより知ることができた。（施設 L）
- 障がいに対する考え方に変化があった。（施設 J）
- 「障がい」についての考え方を考える事ができたこと。（施設 J）
- 福祉施設へのイメージがとても明るいものになり就職をしたいと一瞬思いました。（施設 J）
- 障がいの見方、考え方が変わった。私自身が助けられることが多かった。自分のこれからについて考えるきっかけになった。（施設 J）

---

#### 〈仕事に対して学んだこと〉

---

- 幼稚園や保育園での保育者の役割の相違点を感じることができた。（施設 B）
  - 職員のお仕事を体験させていただいたこと（施設 D）
  - 幼稚園実習とは違う貴重な体験ができたこと。障がいへの見方が変わり、理解が深まったこと。（施設 D）
  - 入浴の支援や食事の支援、夜勤などいろいろな経験ができたこと。支援員の方は全員優しく、利用者さんは素敵な人ばかりでいろいろな方に出会えたこと。（施設 H）
-

〈感謝していること〉
・職員さんが皆良い人で実習をしやすかった（施設 L）
〈自分の成長〉
・自分が経験したことがなかったことを知り、視野が広がった。（施設 G）
〈その他〉
・ごはんがおいしかった。（施設 B）
・来てくれてありがとうと言われたこと、お別れ会の時に利用者さんが泣いてくれたこと（施設 K）
・自分の考えが変わった。（施設 M）
・楽しかった（施設 I）
・マイナスだったイメージがプラスになりました。（施設 J）
・たくさんのことを学ぶことができ、職員の方がとても親切だった。（施設 G）
・全てのことがあたりまえじゃないと気づけた（施設 G）

## 2)実習で大変だったこと、実習中に困ったこと

Table.12の通り、最も多かったのは、利用児・者とのかかわりやコミュニケーションの難しさに関するもので、この点は昨年度同様だった。知識不足によって大変さを感じたと記述した学生もみられた。かかわりの楽しさ、あるいは楽しさよりも困難さを感じた学生の中には、利用児・者にかかわり、気持ちに寄り添おうと努力し、真剣に実習に取り組んでいたがゆえに難しさを感じた者もいたようだ。実習で「大変」「困った」というネガティブな感想も、学生の成長にとって重要なきっかけになったからこそ、実習の前と後とでは良い方に意識が変容したのだとも考えられる。真摯に実習に取り組んだ学生が抱えた課題に対して、実習後、どのようにフォローしていくのかということも、学生を指導する教員側の課題と考えられる。

一方で、施設職員に対して理不尽と感じたという記載もあった。状況の詳細は不明だが、現場の忙しさにより、職員が実習生に対して時間をとって指導する時間をとれなかったのだとすれば、学生が現場の状況を目にしながらも理解できていなかった可能性も考えられる。

Table.12 実習で大変だったこと、実習中に困ったこと（おもな回答）

〈利用児・者とのかかわり、コミュニケーション〉
・基本担当部屋の子もたちとの関わりだったので、他部屋の子もからの遊びの誘いに困ったときがあった。（施設 B）
・早起き、トラブル時の対応（施設 C）
・子ども達の特性を把握すること。子どもの予想がうまくできなかったこと。（施設 D）
・言葉でコミュニケーションが図れない方とのかかわり方（施設 K）
・最初の方に言葉だけでしか伝えられず他のコミュニケーションのとり方がわかるまで大変でした。（施設 K）
・コミュニケーションの違い（施設 M）
・利用者とのコミュニケーションの取り方が、1人1人違うところが難しかったです（就労 B などでは、利用者の障害度合いや症状がわからないため）（施設 M）
・おとなの方なので声かけ「注意」などがとても困りました（施設 I）
・利用者とのかかわり（施設 I）

- 男性利用者からのスキンシップに困った。(施設 I)
- 何を伝えたいのかわからなかった時 (施設 H)
- お話が理解できない人との関わり方。利用者さんの気持ちを理解してあげられなかったこと。(施設 H)
- 利用者の方とのかかわり方 (施設 J)
- 子ども相手ではなく大人なので、何をしたらよいかわからなかった。(施設 J)
- 水分補給の援助と入浴介助 (施設 J)
- 利用者の方の気持ちをくみとること。(施設 J)
- 利用者さんは、コミュニケーションをとることが難しい方が多く、作業の時間や移動に時間がかかったこと。(施設 G)
- 障害の理解 (一人一人の) が大変で対応も難しかった。(施設 G)
- 不潔行為への対応 (施設 G)

---

〈実習現場での学びについて〉

---

- 日々の日誌や指導案。実習中にメモがとれないこと。(施設 D)

---

〈施設、職員とのコミュニケーション等について〉

---

- 夜勤のときに子どもが大きくなけんかをしてしまい、夜勤担当の先生が忙しく、しっかりと教えてもらえませんでした。わからないまま終わってしまい、次の日、なぜか怒られました。(施設 B)
- 実習担当に指示されたことをしていると遠回しに怒られた。言われたことだけやっていると、考えて動くように言われ、言われていないこともやると、言われたことだけやるように言われた。(施設 B)
- 職員との関わり (施設 F)
- 製作室で製作をしていたときにいきなり「子どもが好き?」「どこが好きなの?」と聞かれたこと。(施設 F)

---

〈その他〉

---

- 金銭面 (施設 B・I)
  - 寝不足 (施設 B)
  - 食事の用意 (施設 I)
- 

(4)その他、実習に関して教員や実習施設に伝えたいこと

Table.13 のとおり、「後輩にも伝えたいこと」には、実習の充実感や、職員の手厚い指導をもとに「安心して実習できる」と記述した学生もいるが、一方で「楽しいからおすすめ」という記述が散見した。アンケート調査を実施するにあたり、「次年度の実習に役立てるため」と説明したために「後輩へ向けての実習の感想」と捉え、「不安をもたずに実習に臨んでほしい」と伝えようとしたのだとも考えられる。しかしそのように解釈したとしても、施設に対して「指導を行うとき、柔らかく伝えてほしい。」と求めるような、実習生としての自覚や、自分たちの立場に対する認識が低い学生もみられる。前年度にはみられた、実習に際しての基本的な心構えや、実習は大変ではあっても得るものがあるという記述がみられなかった。

学校に対する意見では、事前指導において、本学教員から施設実習の大変さや、利用児・者の難しさについて伝えたことに対して「子どもと関わるうえで、とても負担になったし、先生が想像しているようすとは違っていました。」と記述する学生もいた。

Table.13 実習に関して教員や実習施設に伝えたいこと（おもな回答）

<p>〈後輩にも伝えたいこと〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大変充実した実習だった。2週間は短いと感じた。（施設 D）</li> <li>・思ったより楽しい（施設 M）</li> <li>・最初のオリエンテーションで、利用者に対しての思い（奇声をきくとこわいなど）を、1人ひとり丁寧に聞いてくれました。障害のある人に対する苦手意識があれば、その場は無理をしてでも関わらなくて良いとのことでした。職員の方も接しやすく、安心して実習に行ける実習先です。（施設 M）</li> <li>・通勤は時間がかかって大変ですが、楽しく実習できるので、是非、後輩に L を選んでほしいです。（施設 L）</li> </ul>
<p>〈実習先に対して伝えたいこと〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・貴重な体験をありがとうございました。これから関わる子ども達にも、明るく真っ直ぐに向き合いたいと思いました。（施設 D）</li> <li>・利用者さんに対しての対応法を統一してほしい（施設 F）</li> <li>・指導を行うとき、柔らかく伝えてほしい。（施設 F）</li> <li>・とても楽しく実習することができました。（施設 H）</li> <li>・とてもよい施設で、施設の方も本当に優しく、逆にできない自分がもうしわけなくなるくらいでした。人を思いやる気持ちが大切なのだと改めて感じた実習でした。（施設 J）</li> <li>・職員の方は忙しい中でも丁寧に色々なことを教えてくださいましたのでとても勉強になりました。（施設 J）</li> </ul>
<p>〈実習先について学校へ伝えたいこと〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の事前に学習（講義の中で）したことが、子どもと関わるうえで、とても負担になったし、先生が想像しているようすとは違っていました。（施設 B）</li> </ul>

#### 4. 今後の課題

必修科目としての「保育実習 I」については、乳児院等をはじめとする児童福祉施設等への実習が必修科目として設置されているが、保育所に比較して、児童福祉施設の設置数は限られている。このため、本学の学生は大半が子どもとかかわる保育者を目指しているが、例年、多くの学生は児童の発達支援や児童養護にかかわる施設ではなく、成人を対象とした障害者施設で施設実習を行っており、今年度も約7割の学生が成人を対象とした障害者施設で実習を行った。また、市街地にある障害者施設は少ないため、施設によっては自転車や保護者の送迎によって通わざるを得ないという交通手段の問題がある。札幌や遠軽等の遠隔地の実習先を希望する学生や、近隣の町に居住していても通うことが難しい学生は実習施設内に宿泊をすることから、経済的な負担を訴える学生もいた。

実習先が成人を対象とする福祉施設である学生の数が、児童福祉施設で実習をする学生を上まわり、遠隔地での実習を余儀なくされる原因としては、他の養成校との期間重複も挙げられるが、養成校としては施設との連携強化や、受け入れ先の拡充が課題となっている。また、指定保育士養成施設の半数以上が四年制大学となっている中で、短期大学において質の高い保育士の養成を課される本校が、具体的にどのような教育を学生に提供していくのかという問題は、常に再考と検討を重ねるべき課題となっている。

しかし一方で、今年度のアンケート調査では実習の満足度に関する質問項目は設定していなかったが、「施設勤務の保育士になりたいと思ったか」という就職希望についての質問では、76.7%の学生が

実習前よりも実習後で施設保育士としての意欲が向上した。特に障害者支援施設で実習した学生については、実習前は75.4%が「思っていな」かったが、実習後には施設保育士にはなりたくないと回答した学生は26.6%で、60.3%が「なりたい」と回答した。つまり、大半が保育所保育士や幼稚園教諭を目指してきた本学の学生だが、特に障害者支援施設で実習をした学生の意識の変化が大きい。成人者を対象とする施設で実習をすることも、障害や障害者、施設保育に対する意識の変容という意義がみられた。

約10日間という短い実習期間の中でも、障害児・者や施設について理解を広げ、深めることができた学生もいたことがうかがえた。興味関心を持つことにより、残り半年の学生生活での意欲的な学びにつなげられたなら、施設実習には十分に意義があったといえるだろう。施設職員の職務や責任の重さ、個々に応じた支援のあり方を学ぶと同時に、障害児・者に対するまなざしのあたたかさや気遣い、ケアのあり方を目の当たりにして感じるがあったようすもうかがえた。多くの学生は、多忙な中でも実習生をあたたかく迎え、ていねいな指導をしてきた職員に対する感謝の気持ちを示した。

本調査から明らかになるものではないが、幼稚園・保育所には発達や養育等、多様な問題を抱えている子どもたちも登園してくる。保育現場ではさまざまな子どもたちがともに育ちあい、保育者は子どもの権利を守りながら支えていることを理解し、意識しながら施設実習で学ぼうとする意欲的な学生もみられる。

調査からは実習に対する認識の甘さ等も見受けられたが、利用児・者や施設から学んだことを保育者として活かしていきたいと考える学生も一定以上いた。

施設実習後に、あるゼミでは実習のあり方について話題になり、「幼稚園・保育所には観察実習やボランティアがあるが、施設でもそのような機会が欲しかった」という声が上がった。事前に施設の様子や雰囲気を知る機会があれば、より充実した施設実習になったのではという考えによるものである。本学では「保育実習実施基準」に則った実習の他に、1年次の夏期休業中に1回以上課しているボランティア先として、幼稚園や保育園の他に、障害児施設や障害者施設を紹介している。この他、幼稚園と保育所における、1年次の6月前後に6回、半日の現場体験実習、10~11月頃に4回程度の観察実習を課している。つまり福祉施設については、6月初旬の施設研修旅行で3施設を見学する他は、希望者がボランティアへ行く程度で、事前の観察実習等は特に課していない。施設の多くは郊外にあるため、交通機関の利便性の低さなど、考慮すべき課題も大きいだが、観察実習先として検討の余地は十分あると考えられる。

本学は短期大学のため、四年制大学に較べると修学期間が短く、時間的余裕がない中で専門科目を学び、実習に臨むことになる。学生の多くは北海道東部地域で生まれ育ち、本学で学んだのち、地域の保育者として巣立っていく。このため、本学は地域に根ざした保育士・幼稚園教諭養成機関として地域からの期待が大きい。保育者養成には、特に地元の福祉施設の協力は不可欠である。

以上のとおり、本調査から事前・事後指導のさらなる充実、福祉施設への理解を高めるための機会設定等の検討課題を得た。今後も受け入れ施設との連携を密にして、さらなる教育効果の向上を目指していきたい。

## 〈文献〉

全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会編 (2018). 『保育実習ガイドライン (第3版) (施設実習編)』

# 未就学の子どもたちのためのファミリーコンサートの実践 —豊かな感性の育ちを求めて—

進藤 信子<sup>i</sup> 田中 英里<sup>ii</sup>

## 1. はじめに

### (1) 問題意識

本稿では乳幼児の育ちに関わる音楽とは何か、また時代の流れの中で幼い子どもたちにとって音楽を体験することにより、「豊かな感性を育てていくこと」について展望する。

フレーベルの思想を日本の幼児教育改革に結びつけたのは、倉橋惣三とされている（上・山崎，1976）。フレーベルの教育目的は子どもの創造的な活動衝動を育てることにあり、幼児期の遊びは未来の全生活の子葉で、人間の未来の生活は幼児期に源泉を持っていると彼は主張した。つまり親や保護者は、幼児期の遊びの重要性を認識して遊びを通して教育を行われなければならないとしている（上・山崎，1976）。

また、糸賀（1979）は幼児期における音楽について、重要な課題として次のように位置付けている。「幼児教育における音楽の特性は、単にパターン化された技術や知識の習得にあるのではなく、子供の旺盛な情動を投入する全人的な経験にある。したがって、それは音楽として孤立して学ばれることでなく、心身の機能の成熟、知覚や思考力の伸長、情緒や社会性の発達と深くかかわりあいそれらが調和して展開されることで、初めて音楽活動も成果を上げることができる。（中略）音楽教育の重要性は、音感覚や音楽性という音楽の基礎力が、大部分生得的であるか早期に得られることで、この時期を逸しては、教育的効果が顕著に失われることにある。したがって、音楽はまさに乳幼児期の発達の課題と言っても過言ではない」。

以上のように、乳幼児の音楽教育に対しては慎重に、成長をふまえた配慮を持ってこそ効果があるといえる。

### (2) 千葉県浦安市におけるうらやす財団の実践から

現在でも、コンサートの開催にあたっては「演奏の途中で子どもが騒いだり、泣き出すことを自分の鑑賞している時間の中では、認めたくない」と、未就学の子どもに対して入場制限をしているケースが多くみられる。子どもをもつ親も音楽を鑑賞する環境が制限されるが、子どもが生の音楽に触れる機会が少ないという点でも残念に感じるという声は多い。

演奏家としても、保育者養成校において乳幼児の音楽教育を教授する者としても、子どもが音楽に親しむ機会を失うのは残念に感じることである。そこで、幼児及び児童を対象とした音楽会を先進的かつ意欲的に実践している、千葉県浦安市における公益財団法人うらやす財団の実践例を参考に、未就学の子どもたちが親子で参加することができるコンサートの実践に取り組んだ。最初にうらやす財団について紹介したい。

---

<sup>i</sup> 幼児教育学科教授 <sup>ii</sup> 幼児教育学科非常勤講師

うらやす財団は2009年より、オリジナル脚本演出のコンサート「ピュアホワイトクリスマスコンサート」を開催している。うらやす財団とは、浦安市文化会館や浦安市民プラザの運営母体である。0歳からの入場を可能とした、こどもの「コンサートデビュー」（生まれて初めての音楽会へ参加）をスローガンに毎年実施しており、1,200席のホールで地元のクラシックアーティスト、ダンサー、児童合唱団、地元の作曲家が集結してコンサートを展開している。

このコンサートには釧路出身の若手音楽家も関わっているが、未就学の子どもたちが生の音楽に触れる貴重な機会として、また、若い音楽家の活躍の場であることから、釧路においてもぜひ開催したいとの強い思いがあった。

子どもたちには幼い頃から生の音楽に触れる機会が必要であると強く感じてきた筆者には、この企画と実践が大きなヒントとなった。かつて浦安のクリスマスコンサートを客席で鑑賞していた子どもたちが、今では演奏者や合唱団員、ダンサーとしてとして出演しているという。長年出演している釧路出身の若手演奏家から、コンサートの概要やコンセプト等について聞く機会があった。特に若手のアーティストに活動の場を提供し、未就学の子どもたちが親子で生の音楽に触れる機会となっているという話に感銘を受け、ぜひ実現したいと思った。また、釧路においても、同様のコンサートを待ち望む声が多いことから、立案に至った。

試みとして、2018年及び2019年12月に、未就学の子どもたちを対象にしたコンサートを実施した。その後、2019年には「ピュアホワイトクリスマスコンサート」を客席で体験することができた。本稿ではこの実践について、経過や内容とともに、標題である幼い子どもたちの音楽体験と情操教育について考察したいと思う。



## 2. 開催の実際について

### (1) 幼い子どもたちのための「クリスマスコンサート」—プロの若手演奏家による実践—

2018年12月、釧路において第1回目となる「クリスマスコンサート～スクリーンの絵本やクラシックの演奏を楽しみましょう～」を実施した。

準備は開催6か月前から開始した。参加する子どもの年齢、時期、内容等について、釧路市内の保育者や、釧路市子育て支援拠点センター長、報道機関の記者等、子育て支援に関わる様々な職種の方の意見を取り入れながら企画を進め、12月12日（水）に実施した。開催時間は、来場する保育園や幼稚園の時間に合わせて午前中とした。今回の開催のきっかけとなった、浦安のコン



サートに毎年関わっている地元出身及び札幌在住の演奏家たちも演奏に参加した。

釧路には様々なコンサートホールがあるが、この年は収容者数200名の北海道立釧路芸術館アートホールで開催した。釧路短期大学が主催し、参加者は釧路緑ヶ岡学園福祉会系列の保育園4園（75名）と釧路短期大学附属幼稚園（35名）の年長児110名、引率の保育者、釧路市の子育て支援関係者、保護者約150名となった。

プログラムは、ピアノ、フルート、チェロ、歌による、クリスマスシーズンには子どもたちも一度は耳にする『赤鼻のトナカイ』『樅ノ木』などのメドレーから始めた。次に演奏者による



楽器説明をしながらソロ演奏を行った。曲はフルート『葦ぶえの踊り』、チェロ『白鳥』、歌『アベマリア』である。続いて、絵本『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』をスクリーンで投影し、「絵本ミュージックシアター」を上演した。浦安の「ピュアホワイトクリスマスコンサート」でオリジナル曲として演奏され、特別に許可をいただいた、朗読のための器楽曲『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』（洋一郎作曲）を、楽曲の演奏とともに、若手声楽家による歌と読み聞かせを行った。そして最後に、会場の子どもたちや来場者、演奏家が、楽器に合わせて『あわてんぼうのサンタクロース』を、手拍子とともに大合唱した。

表1 第1回クリスマスコンサートのプログラム、内容

プログラム	内容
1 オープニング	クリスマスメドレー 『赤鼻のトナカイ』『樅ノ木』『きよしこの夜』他
2 メンバー紹介とソロ演奏	『葦ぶえの踊り』フルート、『白鳥』チェロ、『アベマリア』歌
3 絵本ミュージックシアター	絵本『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』 ピアノ、フルート、チェロ、歌と読み聞かせ
4 フィナーレ	合唱『あわてんぼうのサンタクロース』

(2)第2回「クリスマスコンサート」 —プロの若手演奏家と保育者を目指す学生による実践—  
第2回「クリスマスコンサート」は、2019年12月7日（土）に実施した。

前回にも参加した釧路緑ヶ岡学園福祉会系列の保育園4園及び釧路短大附属幼稚園に通う子どもたちに加えて、釧路市が運営している子育て支援拠点センターを利用している親子200名も参加した。土曜日の開催だったため、親子連れや、祖父母とともに来場する子どもも多かつ

た。

釧路短期大学の音楽ゼミでは、夏のイベント「EGG」、障がい者施設や児童館のクリスマス会でトーンチャイムの演奏を行っている。この日はオープニングに『きよしこの夜』『ジングルベル』を演奏した。次に、ピアノとトランペットを演奏するゲスト演奏家による自己紹介の後、トーンチャイムとピアノ、トランペットのアンサンブルで『星に願いを』を演奏した。ゲスト演奏家とは、ピアノとトランペット、歌と読み聞かせを担当する地元の若手演奏家である。

次に、ミュージカル「サウンド オブ ミュージック」のなかから『ドレミの歌』を地元の若手演奏家2人によるピアノ連弾で演奏した。

「絵本ミュージックシアター」では、この年は『どうぞのいす』を会場の大きなスクリーンに投影し、声楽家がピアノと歌の他、効果音としてスリットドラムを用いて読み聞かせを行った。声楽家の自己紹介もこのときに行った。特にこの回で用いたスリットドラムは、木育に取り

組んでおり、自然の中で聞こえる音についても研究をしている、釧路市工業技術センターからお借りした。『どうぞのいす』の朗読のための器楽曲は地元作曲家によるものである。

(釧路新聞掲載)



そして最後には、前年も好評であった『あわてんぼうのサンタクロース』を、会場の子どもたちや大人も一緒に大合唱した。

終了後には来場者に、アンケートに協力していただいた。

幼児教育学科で学び、保育者を目指す学生にとっても、多くの聴衆に囲まれ、こどもたちと触れ合うことで「音楽表現を通してこどもの感性にふれる非常に良い経験」となり、来場した子どもたちとの交流には充実したようすがみられた。

また、コンサート終了後はしばらくの間、街などで若いお母さんたちから「楽しい時間だった。」「また企画してほしい」などと声をかけられた。



スリットドラム

表2 第2回クリスマスコンサートのプログラム、内容と演奏者

プログラム	内容
1 オープニングとメンバー紹介	『きよしこの夜』『ジングルベル』 トーンチャイム 釧路短期大学音楽ゼミ 『星に願いを』 トーンチャイム、トランペット、ピアノ 釧路短期大学音楽ゼミ、地元若手演奏者
2 ピアノ連弾	『ドレミの歌』 地元若手演奏家
3 絵本ミュージックシアター	絵本『どうぞのいす』 ピアノ、スリットドラム、歌と読み聞かせ
4 フィナーレ	『あわてんぼうのサンタクロース』 ステージの楽曲と歌、来場者とともに

(3)うらやす財団「0歳からのファミリーコンサート ピュアホワイトクリスマスコンサート10」の参加

第2回「クリスマスコンサート」後に12月14日（土）及び15日（日）の2日間にわたって開催された「0歳からのファミリーコンサート ピュアホワイトクリスマスコンサート10」イベントに初めて参加した。

会場は2日間ともに満席で、親子が楽しむようすがみられた。会場ロビーではアーケードが設けられてクリスマスマーケットが開催され、おにぎりとお惣菜、パン、お菓子、絵本、CD、雑貨販売等の屋台が並んだ。似顔絵を描く屋台や、サンタクロースと写真を撮ることができるフォトスポットも設けられ、来場者のクリスマス気分が盛り上がるように企画されていた。



出演者は約20名のプロの若手演奏家やダンサーの他、かつて客席でコンサートを楽しみ、成長して「いるか合唱団」の一員となった子どもたちもいるという。若手演奏家の子どもたちも祖父母などに連れられて会場に参加している。浦安市のコンサートは2019年度で第10回目を迎えたが、10年間にわたる成果として、現在では世代を超え、地域の多くの人材に支えられて活動が行われる大きなイベントとなっている。

今後の「クリスマスコンサート」の活動も、本学及び学園ばかりではなく、さらに多くの人材を得ながら、地域として継続して取り組んでいきたいと考えている。



### 3. まとめ —アンケート調査の分析から—

今後も未就学の子どもたちへの音楽活動を継続し、さらなる質の向上を目的として、来場した保護者を対象にアンケート調査を実施した。来場時に受付で渡し、終了後に受付にて回収した。保護者92名から回収した。回答者から得た「来場した子どもの年齢」は表3のとおりである。

表3 来場した

子どもの年齢	人数
0歳	10
1歳	16
2歳	7
3歳	6
4歳	5
5歳	2
6～8歳	6

#### (1)開催日時について

「午前中に開催し、お昼寝の時間は避けたほうがよい」「親子で参加できる土曜日・日曜日・祝日がよい」といった要望が多くみられた。保育園が子どもたちを引率して参加する場合、日曜日は難しいので平日が望ましいという意見もあった。

#### (2)日常的に触れ合っている楽器について

コンサートに来場した子どもたちが、日常的に歌や楽器に触れる機会があるのかを知る目的で、「普段の音遊びの中で歌うことや、楽器遊びはありますか」と、音遊び頻度について質問した。その結果、54.2%が「毎日」、45.2%が「週に数回」と回答し、子どもたちは、生活の中ではほぼ毎日音楽に触れていることがわかった。また、「具体的にはどんな楽器ですか?」という質問への回答から、音遊びやお遊戯会、音楽会などの行事の際には、積極的に楽器を使っていることがわかった(表4)。

表4 日常的に楽器遊びで使用している楽器  
(回答数順・複数回答)

歌、ピアノ、ピアニカ、カスタネット、すず、タンバリン、マラカス、木琴、鉄琴、太鼓、リコーダー
--

#### (3)コンサートで「よかった」と感じたこと

全体的なコンサートを楽しむことができたのかという質問に対して、95.7%が「楽しかった」、4.3%は「少し楽しかった」と回答した(表5)。

表5 コンサートを楽しめましたか  
回答数(%)

楽しかった	88(95.7)
少し楽しかった	4(4.3)
楽しくなかった	0(0)

「どのコーナーがよかったか」という質問に対して最も回答が多かったのは、フィナーレの「みんなで歌おう」だった(表6)。ステージと会場が一体となって音楽を共有できたことが高評価につながったと考えられる。

表6 どのコーナーがよかったですか  
回答数(複数回答あり)

みんなで歌おう	51
絵本ミュージックシアター	41
トーンチャイム	37
ピアノ連弾	25

第1回目のコンサートでは、初めて実物のフルートやチェロ等の楽器を見て触れたという子どもが、楽器に対して強い興味を持っていた。声楽家の美しく伸びやかな声で歌を聴くことや、歌と音楽による絵本の読み

聞かせを聞くことはなかなか得られない体験であるため、保育者や保護者は子どもたちのようすから、彼らが楽しんでいると感じていたようだった。

#### (4)自由回答から

##### 1)子どもたちの音楽体験 ―音楽にふれる機会としての意義―

未就学児にとっては長い時間集中することが難しいが、表7にもみられるとおり、これまで聴いたことのある曲や、ふだんから親しみのある曲を楽しんでいたことがうかがえた。

「絵本ミュージックシアター」については、幼児期の感性を育てるという観点から、おおむね高評価を得られた。第1回目の開催に先立っては、『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』が子どもたちにはあまりなじみのない絵本だということから、事前に本学(学園系列)の保育園や幼稚園に届けて読み聞かせをお願いした。このため、子どもたちは絵本のストーリーを把握しており、スクリーンの絵と音楽にすぐに馴染んでいたようだった。第2回目の『どうぞのいす』は内容が単純であったことから、子どもたちにとってはさまざまなイメージを持ちやすかったようであった。

表7 子どもたちに評価の高かったプログラム等

- 
- ・子どもたちは聴くだけでは長時間楽しむことが難しいので、視覚的にも楽しめるものを織り込むとより楽しく参加できる。素敵な音楽に触れる機会だった。
  - ・子どもたちになじみのある曲が数多く聞けて、とても楽しんでいる様子だった。
  - ・スクリーン・ミュージックシアターにとっても興味を持って楽しんでいた。
  - ・知っている曲、身近な曲をみんなで歌ったり聞いたりとても良い経験だった。
  - ・幼児期に素敵な音楽に触れる機会はとても貴重。感性豊かな子どもたちにぜひ本物の音楽を聞かせてあげたい。
  - ・本物の楽器・クラシックを近くで見ることができて、子どもたちにとって良い経験でした。一緒に参加(歌・手拍子)ができてよかった。
- 

##### 2)親子が周囲に気兼ねなく音楽を楽しむ機会としての意義

表8のとおり、子どもを連れた保護者が他の観客に気兼ねすることなく、子どもと一緒に音楽を楽しむ機会を設けるという目的を果たすことができたようだ。

表8 音楽に親しむ機会と捉えての感想

- 
- ・今まで釧路ではなかなかない取り組みだったので良かった。この年齢の子を連れて楽しめる内容はほかにないので、貴重な経験ができた。
  - ・プロの音楽家の演奏会には子供を連れていきにくく、保護者にとって気兼ねなく音楽を子供に聞かせる機会は貴重。
  - ・子どもが騒いだり歩いたりするのを気にせず音楽を楽しめる貴重な機会だと思った。
-

### 3)今後の活動に向けて

先に挙げた表4でみられたとおり、幼児が日常的に親しんでいる楽器とは、ピアノ、カスタネット、タンバリンなど、簡単に扱うことができ音が鳴るものだった。このため、演奏者と一緒に音楽を楽しみ、新しい音に触れるという機会は、子どもの感性を育てていくには非常に有効であると考えられた。

今回のコンサートでは、手拍子を入れてみたが、アンケートの回答からは、子どもたち自身が使い慣れている楽器をコンサートにも持ってきて、歌うばかりでなく、楽器を演奏する機会も取り入れてはという提案もあった。

表9 今後に向けて

- 
- 園児が触れてよい楽器があれば、当日使用されていない楽器も含め名前の紹介や歌とともに楽器も出来る  
と楽しいと思う。
  - 子どもたちが参加できる場面がもう少しあればよい。
  - ミュージックシアターは楽しい取り組みだったが、スクリーンに投影する映像が小さかったのが惜しい。  
もっと大きく投影できると幼児の興味を一層ひけるかもしれない。
  - 今後、何らかの形で、地域に子供が本物に触れることのできる催しとして定着できるとよい。
  - 組織的な取り組みが必要だと思う（文化財団役員）
  - ぜひ機会を増やしてほしい
- 

### (5)まとめ

今後の課題としては、家庭、保育者、釧路地域全体が連携し、実施を継続して、子どもたちの成長を見守っていく環境づくりが大切であると考えられる。筆者は保育者養成校に所属していることから、保育者を目指す学生たちが、子どもの情動を育てるために年齢に合わせた情緒の発達や能力について、意欲を持って理解を深めるよう研究を進めたい。この実践を振り返りながらイベントの改善を続け、今後も取り組んでいきたいと考えている。

第2回目ではスリットドラムを活用した。絵本の読み聞かせの中で用いた「木製の楽器」については、楽器の音が鳴るたびに興味を示していた子どもたちがいて、公演終了後には、スリットドラムの音を鳴らしに駆け寄ってくる姿もみられた。釧路地方は森林にも恵まれている。木育の要素も含めて、今後は子どもが興味・関心を持つことのできる楽器を、学生たちが子どもたちと一緒に制作することも検討していきたい。

平成29年に告示された新幼稚園教育要領の「表現」の項目には、「様々な素材や表現の仕方に親しんだり、ほかの幼児の表現に触れられるように配慮したり、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるようにする」とある。また、平成29年に改訂された新保育所保育指針においては、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿にある「心を動かす出来事などに感性を働かせ

の中で、様々な素材の特徴や表現の仕方に気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」と記載されている。

また、今回の取り組みについては短期大学の地域貢献という観点から、幼稚園教育要領及び保育所保育指針改定の際に議論のポイントとなった、教育内容・教育活動に必要な人的・物的資源などを、釧路市の地域活動を積極的に進めている組織を含めて活用し、効果的に組み合わせていくことに対しても大きな役割を持つと考えられる。

新幼稚園教育要領及び保育指針にもあるように、生の音楽に触れ親しむことが、聴覚の理解や、身体の諸器官の経験を豊かにし様々な感覚を味わうことや、生活・遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになることにとっても有効であることがわかった。

これまでは第一筆者を中心として、個人が協力者とともにコンサートを開催してきたが、今後、組織的な取り組みとしてこのイベントを実施することが可能であれば、活動の継続化につながると考えられる。地元で活動している演奏者はもとより、活動に共感するプロの演奏家ともつながりのある取り組みに発展することも可能であると思われる。

これからも活動が継続していき、この実践が未就学の子どもたちやその家族が音楽に触れるきっかけとなり、音楽が多くの人たちとともに楽しむものとなることを望む。子どもが幼い頃から、家庭や地域などの身近なところに「いつも音楽がある」という環境をつくる、そのきっかけになることを願っている。



## 〈文献〉

デイビット・ルーカス著・なかがわちひろ訳 (2012) 『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』

徳間書店

糸賀英憲 (1979) . 『乳幼児の音楽リズム指導』 北大路書房. p67

上笙一郎・山崎朋子 (1976) . 『日本の幼稚園・幼児教育の歴史』 理論社. p24-25

香山美子 (1981) . 『どうぞのいす』 ひさかたチャイルド

民秋言・西村重稀・清水益治・千葉武夫・馬場耕一郎・川喜田昌代編 (2017) . 『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷』 萌文書林.

# 2019年度 KJC ランドの運営を振り返って

## —来場者を対象としたアンケート調査結果から 第2報—

穴水ゆかり<sup>i</sup> 篠木真紀<sup>ii</sup> 岩野布美子<sup>iii</sup> 白川和希<sup>iv</sup> 進藤信子<sup>v</sup> 吉川修<sup>vi</sup> 井上薫<sup>vii</sup>

### 1 はじめに（調査の目的）

2014年度から開催されてきた「KJC ランド～子どものあそびの日～」は、今年で6年目を迎えた。5年間の実践については「幼児教育学科実践報告 第2号」に述べたとおりである。

詳細は第2号で説明しているが、2018年度実施の「KJC ランド」は本校校舎耐震工事のため、これまでA校舎に設置していたメイン会場を体育館のみに変更し、イベント規模を縮小した。ステージ発表と工作が同時並行にならないように、ステージ発表の合間に工作の時間を設定し、子どもたちはどちらかに集中できるよう時程を組んだ。2017年度以前から参加していた来場者からは戸惑いや規模の縮小を残念に感じるとの声もあったが、一方では、1会場での開催のため、当日のプログラムすべてを楽しむことができたという声もみられた。

今年度は体育館を使用せず、2017年度以前に使用していたA棟校舎ではなく、幼児教育学科の玄関に近いB棟校舎をメイン会場とした。ステージ発表と工作の時間は同時並行とした。2017年度から3年間、毎年イベントの規模や会場等が異なるため、何年も継続して訪れている来場者にとっては落ち着かなさや戸惑いもあったのではないかと考えられる。そのような中で、来場者は、どのような感想をもったのだろうか。

今年度の反省と、今後のKJCランドのあり方を考えるための一助とする目的から、第2号掲載の「2019年度KJCランドの運営を振り返って—来場者を対象としたアンケート調査結果から 第2報—第1報」との比較も交えながら調査結果をまとめた。なお、当日の時程は表1の通りだが、当日のようすについては後掲の「2019年度KJCランドの活動内容（報告）」もご参照いただきたい。

	劇他(2年)			製作遊び(1年)	運営委員会	軽食販売
	B101	B209	B301	B304 B305 B306 B307		幼教玄関 学生ホール
12:00					運営委員集合、確認	学生に解放(昼食)
12:20					開場	
12:30				1年 放送終了後～ 15:30	閉会式(放送) 日程等説明/KJC開始	
13:00	2年A 13:00～ 13:40		2年D 13:00～ 13:40	B304A B304B B305E B306D B307C B307F		一般にも解放
13:30		2年B 13:30～ 14:10				
13:40						
14:20						
14:30	2年E 14:00～ 14:40		2年F 14:00～ 14:40			
14:40		2年C 14:30～ 15:10				
15:30					閉会式(放送)	
15:40	片付け					

<sup>i</sup> 幼児教育学科専任講師 <sup>ii</sup> 幼児教育学科専任講師 <sup>iii</sup> 幼児教育学科教授 <sup>iv</sup> 幼児教育学科専任講師  
<sup>v</sup> 幼児教育学科教授 <sup>vi</sup> 幼児教育学科准教授 <sup>vii</sup> 幼児教育学科教授

## 2 回答者について

来場者には受付で調査用紙を渡した。学生玄関に設置した、子どもたちが帰る前におみやげを受け取るコーナーで調査用紙を提出していただいた。

当日の来場者はおとな 120 名、子ども 137 名だった。36 組（おとな 44 名、子ども 55 名）から回収された。子どもの年齢層は Table.1 のとおりで、KJC ランドのプログラムが想定するおおむねの対象年齢である 3～5 歳の子どもは、来場した子どもの 56.3%を占めた。

## 3 回答から得られた結果

### (1)回答者について

#### 1)回答された子どもとその年齢

調査に協力した 36 組の家族または団体（以下、団体）のうち、子ども 1 名を連れた団体は 20 組・55.6%だった。子ども

2 名の団体は 13 組、子ども 3 名の団体は 3 組で、40%以上の団体が複数名の子ども連れだった（Table.2）。

例年、工作コーナーではおおむね 3～5 歳を対象として想定して準備しているが、アンケートに応じた来場者では 6～11 歳の児童が 34.5%を占めた（Table.1）。遊ぶ目的で来場したわけではない小学生も含まれているとしても、今後は幼児ばかりではなく、児童が楽しむことができるアクティビティの準備も検討していきたい。

#### 2)来場した成人者とその属性

回答によると、子どもを連れて来場した成人者が 1 名という団体は 75.0%だった。多くの家族や団体は成人者 1 人で子どもを連れて来場していると推測され、動きの多い乳幼児を連れた保護者が子どもを気兼ねなく遊ばすことができるように配慮する必要があると考えられる。

調査協力者には含まれていないが、例年、子ども連れではなく来場して、職員や学生に声をかけながらイベントや子どものような様子を観察している保育者がいる。また、土曜に実施した場合、隣接する幼稚園からは保育者が通園児を連れて来場する。本学のイベントに関心をもつ地域の保育者や、近隣の幼稚園・保育所から来場する子どもたちがいることは、学生にとって大きな励みになっている。

Table.1 来場した子どもの年齢層 人数(%)

年齢層	子どもの数
0 歳	0(0.0)
1 歳	3(5.5)
2 歳	2(3.6)
3 歳	11(20.0)
4 歳	8(14.5)
5 歳	12(21.8)
6 歳	6(10.9)
7 歳	1(1.8)
8 歳	5(9.1)
9 歳	4(7.3)
10 歳	2(3.6)
11 歳	1(1.8)
計	55(100)

Table.2 団体ごとの子どもの数と団体数(%)

1 団体ごとの子どもの数	団体数
1 名	20(55.6)
2 名	13(36.1)
3 名	3(8.3)
計	36(100)

Table.3 団体ごとの成人者数 人数(%)

1 団体ごとの成人者数	団体数
1 名	27(75.0)
2 名	8(22.2)
3 名	1(2.8)
計	36(100)

Table.4 来場した成人者の属性 人数(%)

属性	回答した成人者数
保護者	33(91.7)
保育者	0(0.0)
その他	2(2.8)
無回答	1(2.8)
計	36(100)

### 3)来場者が居住する地域

例年、おもな来場者は釧路市及び釧路町内からの来場者とみられるが、調査協力者をみた限りでも、わずかながらその他の釧路管内の町村からの来場者もみられた (Table.5)。すべての来場者を対象に質問紙調査を行うのは難しいが、効果的な広報を行う上でも、受付等で来場したすべての幼児の年齢層と居住する地域の把握をする必要があるだろう。

Table.5 来場者が居住する地域 人数(%)

居住する地域	回答者
釧路市内	29(80.6)
釧路町	1(2.8)
釧路管内	1(2.8)
その他	3(8.3)
無回答	2(5.6)
計	36(100)

### (2)広報について

来場者が KJC ランドの開催を知ったきっかけは Table.6 の通りで、幼稚園や保育所への配布物が 30%弱、公共施設に依頼した配布物やポスターや新聞報道が約 20%だった。

Table.6 このイベントを知った方法(複数回答あり) 回答数(%)

広 報 先	回答数(%)
幼稚園・保育所で配られたチラシ	14(27.5)
学校・児童館のチラシ・ポスター	2(3.9)
公共施設のチラシ・ポスター	9(17.6)
釧路短期大学のホームページ	3(5.9)
ラジオ CM	1(2.0)
新聞	11(21.6)
自治体の広報誌	1(2.0)
友人・知人から聞いた	4(7.8)
釧路短大の学生や教職員から聞いた	2(3.9)
その他	5(7.9)
回答数	51(100)

### (3)企画・会場等について

Table.7 のとおり、調査協力者の半数が工作を「見ていない」と回答し、舞台コーナーも 33.3%が「見ていない」と回答した。どちらかのみに参加して帰る来場者が多いことが推測されるが、参加者による評価はおおむね好評だったことが推察される。

Table.7 企画の印象

	人数(%)					
	大変良い	まあまあ良い	あまり良くない	良くない	見ていない	無回答
舞台コーナー	13(36.1)	9(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	12(33.3)	2(5.6)
工作	6(16.7)	11(30.6)	0(0.0)	0(0.0)	18(50.0)	1(2.8)
休憩室	16(44.4)	7(19.4)	0(0.0)	0(0.0)	8(22.2)	5(13.9)
軽食コーナー	18(50.0)	10(27.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	8(22.2)
会場装飾	22(66.1)	11(30.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(8.3)
全体	19(52.8)	14(38.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(8.3)

自由記述の () 内は、その年齢の子どもを連れて保護者であることを示すものである。また、Figure1～5は昨年度の評価と比較したもので、学生の活動にかかわるもののみを掲載した。

### 1) 舞台コーナーについて

来場者の評価は Table.7 のとおり、見たという来場者からは「大変よい」36.1%、「まあまあ良い」25.0%と、保護者・引率者からの評価は高かった。

自由記述では Table.8 のとおり舞台発表の対象年齢である幼児を連れて来場者からの意見で、「少し長かった」という評価があった。また、「舞台コーナーをすべて見たかった」という意見もあった。

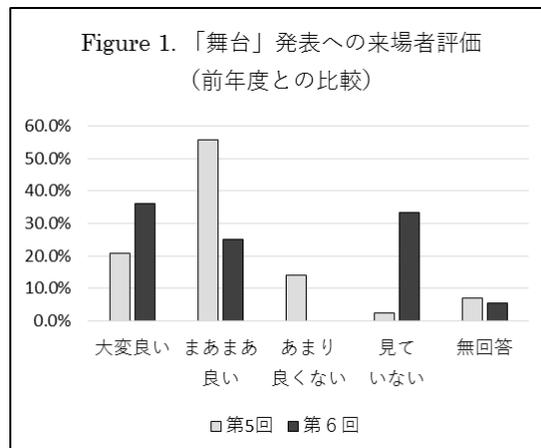


Table.8 舞台コーナーについて (自由記述)

- ・舞台は少し時間が長くて子供があきてしまった。何歳向けくらいか書いてあると、入りやすいかなあと思います。(3歳、5歳)
- ・舞台コーナーの時間が重なっていたため、1つ1つの時間を短めにして、全部が観られる方がよかった。(6歳)
- ・個人的には「うみのせかいによこそ」がよかった。風船がなくなったら終わりではなく、鍵が出てきて宝箱をあける楽しみ、更には風船のプレゼント...最後の最後まで楽しめました。(10歳)

### 2) 工作コーナー

Table.7 のとおり「大変よい」16.7%、「まあまあ良い」30.6%だった。自由記述も含めて評価は高かったが、回答者の半数が工作を見ずに帰っていた。昨年度はステージ発表と同じ会場で実施したため、工作のようすを見ずに帰った来場者はいなかった。また、来場者アンケートにはなかったが、工作会場を2, 3階に設置したため、幼少児を複数連れてきた保護者等の中には、会場へ行くことが困難だったケースもあった可能性がある。本学の廊下や階段はすべりやすいこともあり、可能な限り会場を低層階に集約する等の考慮も必要があるだろう。

Table.1 のとおり、半数以上が子ども1人の団体であるとすれば、きょうだいや友だちと来ていない子どもにも楽しんでもらえるような対応が必要だろう。学生たちはそうした子どもにも楽しんでもらえるよう配慮していたものと考えられる。

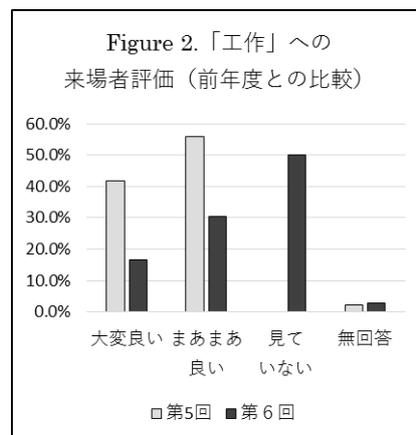


Table.9 工作コーナーについて(自由記述)

- 工作は作って遊べてとても喜びました。頑張ってくださいね。子供達に工作中励ましてくれたり、ほめてくれたり、学生さん達ありがとうございました。(3歳、5歳)
- 一点、改善点を挙げるとしたら、工作各教室にあった、作り方を説明する模造紙かと思います。幼児教育においても見通しを持たせるのはとても大切だと思いますが、おそらく一生けんめい作ったであろう模造紙を、誰も見ていませんでした。(5歳)
- 簡単に作成できるものだったので、たくさんの工作ができて子どもも満足してみたいです。(6歳)
- 子どもが夢中になって、工作コーナーしか見ることができました。(すみません。)(9歳)
- 工作に時間を要し舞台が1つしか見れず残念でしたが楽しめました。ありがとうございました(5歳、9歳)
- はじめて来ましたが、子どもが工作好きなので楽しくすごせました(10歳)

3)その他の企画、会場

昨年度は会場の事情等により設置せず、来場者から「残念」という声があった迷路を今年度は復活させた。迷路内はシート状の鏡を貼った仕切りや割いたビニールテープによる装飾や、跳び箱を利用した段差など、身体を使いながら食感などを楽しむことができるように工夫を凝らして設置した。

Table.10 の自由記述からも、想定した年齢層の幼児が気に入ったようすがうかがえた。しかし、迷路が密室にならないための配慮が、おそらく仕切りの隙間から想定外に子どもが出て迷子になるというハプニングにつながったようだ。

「装飾」についても、今年度は日陰で暗い体育館ではなく、明るい廊下や階段に装飾を施すことができたことも、評価に影響した可能性はある。子どもに人気のあるジブリ作品のキャラクターの装飾と写真を撮る親子の姿もみられた。

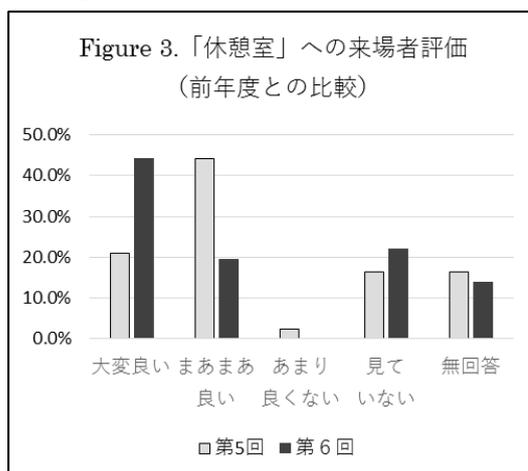


Table.10 他の企画、会場 (自由記述)

①休憩室について

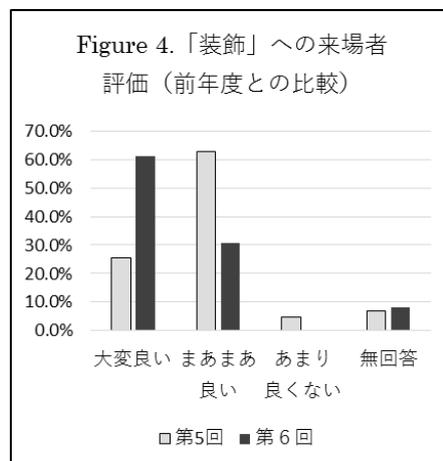
- オムツを捨てるゴミ箱があったらうれしいです (1歳、4歳)

②軽食コーナーについて

- 軽食コーナーが行った時には終わっていたのが残念でした (6歳)

③迷路について

- 1人出口から出ず外の部屋へ行き、迷子になりそうでした。  
3歳、5歳)
- 迷路コーナーはお気に入りになったみたいで何度も遊んでいました。(4歳)

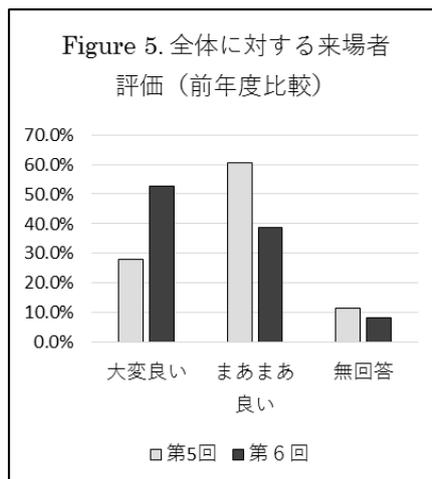


#### 4)全体について

自由記述からは、開始から終了まで楽しんだ幼児や児童もいたようすがうかがえる。

Table.11 企画、会場、規模、その他（自由記述）

- いろいろなコーナーがあり、12時半～3時半ずっと楽しく遊んでいました。（4歳）
- PR 不足かな？せっかいい企画なのに…。（3歳）
- 時間が足りなかった（5歳、8歳）
- 楽しくてまたきたいといっていました。（5歳、10歳）
- 今年は、旧短付高部分が会場でしたが、入試に来た時を思い出しました。



#### (4)学生について

自由記述には、学生に対するねぎらいの言葉もあった。

Table.12 学生に対して（自由記述）

- 子どもの相手を学生さんがたくさんしてくれてありがたかったです。（1歳）
- 子供達に工作中励ましてくれたり、ほめてくれたり、学生さん達ありがとうございました。（3歳、5歳）
- 学生のお姉さんお兄さんもとても優しくて良かったです。（4歳）
- 準備おつかれさまです。（4歳、8歳）
- 学生さんの一生懸命な姿が印象的でした。子どもも喜んでいました。（5歳）
- 学生の皆さんが、子ども達のために一生けんめい活動している姿がとても良かったです。釧路の幼児教育のために、これからもがんばって下さい。（5歳）
- 学生さん達が来場者（小さな子ども達）にやさしく接しているところが印象的でした。ご苦労様でした。（9歳）

## 4 終わりにかえて

前年度は 90.7%から「また来たい」という回答を得た。今年度は無回答を除き、回答者の「ぜひ来たい」（72.2%）、「まあまあ来たい」（25.0%）を合わせると、回答者の 100%が「また来たい」と回答した。

全体的に前年度よりも評価は高かった。ただし、前年度は時間帯によって提出ボックスのあるテーブルの近くに案内の学生が立っていたが、今年度は学生が提出用テーブルの前に座っていたことが、評価に影響した可能性はある。当日来場した保護者が 120 名で、回収数 36 ということからも、今回分析したものがすべての意見や感想ではないことも念頭に置いて、高評価を謙虚に受け止めたい。昨年度よりも評価が高い理由としても、昨年

Table.13 このイベントにまた来たいと思うか  
人(%)

ぜひ来たい	26(72.2)
まあまあ来たい	9(25.0)
あまり来たくない	0(0.0)
来たくない	0(0.0)
無回答	1(2.8)
計	36(100)

度は会場の設定や運営等が例年とは異なるものとなったため、来場者にも戸惑いがみられたことが影響したとも考えられる。

「KJC ランド」には冬の遊びの場としての需要があり、例年楽しみに来場される保護者や子どもたちがいるのは確かようだ。今後も KJC ランドのさらなる発展のために、学生を含めた学科内で十分に議論し、検討していきたい。

## 2019年度 KJC ランドの活動内容（報告）



今年で第6回目となった「KJCランド～こどものあそびの日～」。  
学生たちはみな、子どもが大好きです。この日のために準備を進めてきた学生たちにとって、来場したお子さんたちの笑顔がなによりうれしい1日となりました。

### 舞台コーナー

保育の5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）をベースとした、2年生による創作劇です。12月に本学附属認定こども園及び協力園で実践した内容を改善して発表しました。



### 工作コーナー

ブース形式の工作コーナーでは、6種類の工作を準備して子どもたちと簡単な工作をしました。想定する対象年齢はおおむね3～5歳です。担当する1年生にとっては翌々週から1週間の、初めての保育（観察）実習前に子どもとかわる貴重な機会でもあります。



## 迷路

子どもたちに人気の迷路は、昨年は会場の都合上お休みしましたが今年復活しました。ビニール袋やテープなどのシャカシャカした手触りや音を楽しむ、くぐる、上る、輪に合わせてステップするといった身体活動を取り入れるなど、子どもの興味や特性を活かして設営されました。



## 休憩室・授乳室・

休憩室には木のおもちゃや絵本、紙芝居、ぬいぐるみなどを用意し、ゆっくり遊びながら休むためのスペースにしました。授乳室には親子がくつろいだ時間を過ごすことができるように、白を基調とした装飾の部屋にソファやおむつ台、ぬいぐるみなどを設置しました。



## 会場装飾

今年度は、ステージ発表や工作の会場となった教室前の装飾が充実していました。

廊下などは、担当の学生とアートゼミが中心となって行いました。ジブリ映画のキャラクターは子どもたちに大人気、親子で記念写真を撮る姿もみられました。



## 軽食販売コーナー

今年度は「大きな木」「ひかり自立センター」「こめしん」から出張販売のご協力をいただきました。このコーナーは来場者のために設置していますが、学生や教職員も毎年楽しみにしています。また、本学で商品開発された「咲くサクッキー」も販売しました。



第6回



# KJCランド



たのしみ  
ちびっこ大集合!

たんきだいかく かくせい  
短期大学の学生と

いっしょ  
一緒にたのしもう!

1月18日

じかん

12:30~15:30(12:20 かいじょう開場)

どようび

ばしょ

くしろたんきだいかく とう  
釧路短期大学 B棟

もちもの

うわぐつ



予約不要、入退場自由  
軽食販売もあります

げき てつく  
劇や手作りゲーム

こうさく  
工作をして

あそぼう!



にゅうじょうむりよう  
入場無料

後援/釧路市 釧路市教育委員会、北海道新聞釧路支社 釧路新聞社 FMくしろ NHK釧路放送局  
札幌テレビ放送(株) 釧路支社 釧路短期大学後援会 釧路短期大学同窓会

お問い合わせ: 釧路短期大学 0154-68-5124 (担当: 篠木)

〒085-0814 釧路市緑ヶ岡1丁目10-4

## 執筆者・研究協力者

川嶋 厚子 (貝塚幼稚園 園長) (釧路短期大学 非常勤講師)  
菅 彬子 (貝塚幼稚園 教諭)  
山本 竜馬 (貝塚幼稚園 教諭)  
穴水 ゆかり (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)  
岩野 布美子 (釧路短期大学 幼児教育学科 教授)  
白川 和希 (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)  
吉川 修 (釧路短期大学 幼児教育学科 准教授)  
井上 薫 (釧路短期大学 幼児教育学科長・教授)  
篠木 真紀 (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)  
進藤 信子 (釧路短期大学 幼児教育学科 教授)  
田中 英里 (釧路短期大学 非常勤講師)

### 釧路短期大学 幼児教育学科 実践報告 第3号

---

2020 (令和 2) 年 3 月 31 日発行

発行所 学校法人緑ヶ岡学園 釧路短期大学 幼児教育学科  
〒085-0814 北海道釧路市緑ヶ岡 1 丁目 10 番地 42 号  
TEL. 0154-41-0131 (代表)

---